明治三十年八月五日發行

女鑑

第百三十八號

東京國光社

女鑑第百三拾八號 目録

荷田蒼生女



家婦たる身の心がけ

吾人は、嘗て母の御庭の訓へを論じて、兒童を養ひ育て訓へ導き行くには、よく感情的方法によるべき事を云へり。やがて、自ら美を云ひ美を行ひ、自ら高く志し高く進み、自ら正しく起き正しく臥し、自らよく勉めよく勵み、自ら美はしき手本と成りて、兒童の自らこれに感じ、知らず〳〵これに習ひ、さて美はしき人と成らむやうなる方法を心がけざるべからざることを云へり。而して、この方法たるや、單に家庭に立ちて兒童を訓へはぐくむ上にのみ限らず。吾人は、また、一家の婦と成りて、家族を守り治め行く上にも、すべて、此の方法によらざるべからざる事を云はむとす。

一家の婦と成り、一家族をよく穩かに治め導くといふ事は、決して容易の事に非

ず。たゞに嚴しく命じ、嚴しく教ふるのみにては、决してこれを治め導くを得ず。されど、たゞに笑うてのみうち見、笑うてのみうち聞き、そが爲すにまかしてのみありても、また、なかく\に、これを治め導く事は能はざるべし。唯これを得るは、庭の訓へと同じく、感情的方法によるべきのみ。

家族の言語の美はしからむことを望まば、先づ、我が言語を美はしくすべし。家族の振舞のやさしからむことを望まば、先づ、我が振舞をやさしうすべし。家族の心情の美はしく温和ならむ事を望まば、先づ、我が心情を美はしく温和ならしむべし。家族の道德を高く淸かならむ事を望まば、先づ、我が道德を高く淸うすべし。家族の思想觀念の高尙優美ならむことを望まば、先づ、我が思想觀念を高尙優美ならしむべし。家族の起臥の正しからむことを望まば、先づ、我が起臥を正しうすべし。家族が朝夕の話柄の高尙ならむことを望まば、先づ、我が朝夕の談話を高尙にすべし。家族の素質を望まば、先づ、おのれを質素にすべし。家族の勤勉ならむことを望まば、先づ、我れ自ら勉め勵むべし。家族が日毎に早く起き

んことを望まば、先づ、我れ日毎に早く起くべし。家族が飲食をつゝしまんことを望まば、先づ、自らの飲食をつゝしむべし。家族が身体を清潔にすべきことを望まば、先づ、自らの身を清潔にすべし。家族の遊樂の高尚ならむことを望まば、先づ、我が遊樂を高尚ならしむべし。

斯くの如くして我が身を、先づ、高く、美はしく、正しく、賢く、やさしく、美はしき手本となして、而して家族の、自らこれを見、これを聞き、これに習ひ、これに導かれ、また優美なる高尚なる方正なる賢良なる質素なる勤勉なる家族と成りゆかむやうにせざるべからず。これ、一家の婦となりて、其の一家族を治め導き行くべき道なり。

然るに、今の世を見るに、一家の婦と成れば、反て自身を治めずして、徒らに家族をのみ正さむと爲す者多し。例へば、言語や擧動は温和に爲すべしと云ひつゝ、教ゆる我が言語擧動は嚙みもつかむずるばかり蹴り飛ばさむずるばかり。みだらなることは話すべからずと云ひつゝ、常に我れ自ら俳優の美醜などを口にし。心や

行ひはやさしくすべしと云ひつゝ、我れは舅姑に良人にやさしく仕ふることをせず。他人の事を猥りに是非せぬものぞと云ひつゝ、やゝもすれば、おのれ自ら先達にて、隣家の彼此を噂し。朝は必ず早く起きよと云ひつゝ、我れは窓の日かげ高きまでも起き出でず。人は勉め勵まざるべからずと云ひつゝ、おのれは終日何事をも爲さず遊び暮し。つとめて質素の風を守るべしと常に教へ置く家族の前にて、おのれは平生無益の奢侈にのみ耽り、而して、其の說く所をきくに、おのれは一家の婦なれば、斯く我儘に爲すもよし、家族は斯く爲すべきものに非ずと云ふ。斯の如き有樣にて、いかでか其の家族を美はしく治め導くを得む。一家の手本と成るべき者が、斯の如く汚くみだらなる者にして、いかでこれに從ふ家族の汚くみだらならざるを得む。されば一家の風儀美はしからず、家族の間正しく治まらざるもの多し。

人は、感情を以て動ける動物なり。常に高尚優美方正賢良なる事物に感じゆかば、高尚優美方正賢良なる道に動かざるを得ず。故に、一家の婦たる女子は、宜しく

此處に心がけざるべからずといふなり。

論説



女子教育に就き

井上龜六寄稿

「女子と小人とは養ひ難し」など云へるも、柳眉を顰して不平の感想を抱き玉ふ令孃達も在すべけれど、吾人豈漫りに聖人の言を挾んで、諸孃を輕侮するの無禮を學ぶ者ならんや。玉顔を犯して敢て苦言を進むる所以のものは、深く女子教育の上に就きて憂る所あればなり。冒頭に揭ぐる語は是れ聖人の言、其の意蓋し女子を薫陶教育するの困難なるは、小人をして改過遷善せしむるの困難と軒輊なきを謂ふもの、女子を小人に比するの不倫は必ずしも咎むるに足らんや、女子教育の難事たる、聖賢といへども尙且つ之を識る、宜べなり女子教育の如き大業を、一片の赤誠なき群小教育家の掌中に玩具たらしめ、以て奏功の實を望まんとして數々失敗したる。

醉歐醉米の弊風は一と度飜譯的女子教育法に失敗せしめ、而して折衷的教育法は起る、此間日本女子に固有の美點は、全然破壞せられ、日本女子に固有の道念も亦日々に銷磨し去り、婦女子の品格と德性とは一も掬するに足るべきなし。要するに我女子教育は舊方法を破壞して、而して未だ新方法の牢乎として確立するに至らざる過渡に彷徨せるものにして、換言せば試驗的教育中に置かるゝものと謂ふべし。現時婦女子の社會に於ける待遇を見るに、洋裝を著けて鴃舌を弄するの婦女子が、文明國の婦人なりとして、愛重せらるゝあれど、小笠原流の容儀に嫻ひ、父母の膝下にありて幼時より、女大學を誦習したる婦人の眞日本の婦女子として尊敬を受くるあり。社會上の待遇の兩面に見て、女子教育の方法毎に散漫にして浮動なるを知るべし。而して我が邦の女子教育は竟に牢乎たる基礎に立つの日を見る可からざるか。

建國の鴻基は萬事を決定するに足るべし。獨立國は教育の大本を、外國の事例に徵するの必要なし、聖天子の下し給ひし教育に關する詔勅は、唯り男性のみに限るべからず、神聖なる詔勅の精神を如何にして之れを我が女子教育の上にも全からしめかんか、是れぞ今日女子教育の方法に就きての一疑問たるのみ、女子教育の主義及び精神に至りては、亦伯勞の辯を費すを須んや、已に女子教育の主義を認得して疑ふべきな

しとすれど、枝葉の論は截然として刄を迎て解くに異ならざるべきのみ。外人の庇蔭を受けて、外邦の主義を皷吹する教育家は措て問はず、今日に於て日本女子を教育するの主義に就きて、誰か疑を容るべきあらんや、困難とする所は方法のみ、方法にして若し女子教育の軌道を失するあらんか、女子教育の大本は爲めに荒廢し教育の主義は爲めに阻格せらる、方法豈輕視すけんや。而して特に女子教育に就きて此困難あるを識る、聖人の言茲に於て驗あり。

明治の聖代には、僻邑寒村と雖も、庠序學校の設けあり、土偶視せられて一方に偏置せられたる婦女子も教育の恩德に浴するを得、俄然として其面目を一新したるの觀あり、然りと雖も所謂過渡期に於ける現今の婦女子は、果して今の教育を受けて而して其の功德を感受したるか、教育の力に依て、自己の德性と品位に光輝を添へ得たりと自信するか、吾人は之れを諸孃に問ん。而して復た世の女子を有する父兄諸君に問ん。螢雪の苦を甞め、漸く校舍を出でし世の才女名媛は、學殖文章、將丈夫をして瞠若たらしむるに足るべし、而も裁縫の技に疎く、割烹の事に暗く、爲めに一家主宰の能力を缺き、靑春既に過ぎて、獨棲空しく身の夏瘠を嘆ち、而して竟に秋風蕭條の間に一生を送るの恨みあるはなきか、而して父兄も亦最愛の女子をして、十年の苦學却て良緣を

失はしめたるの悔なきもの果して幾人かある、吾人は現在社會に於いて、敎育ありと自稱する婦女子の境遇に觀到する毎に、胸中此感に切なり。

妙齡にして多少敎育ある女子中には、輕々しく女子獨立の事業を說き、得々然として獨棲の淸節を口にするものあるを聞く、是れ蓋し歐米婦人の狀態を生ま聞きして而して之を誤解したるものにあらざらんや、男女和合して各配あるは天理の然らしむる所なり、然れども一國人口上の關係に於いて、歐米諸國中男子の數女子に比して、少數なるあり、隨て多數の婦女子は適當なる配偶を求むること困難なるものあり、乃ち社會上の必要は、女子の獨棲以て其の生活を支持するに足るべき業務に習熟せざるべからざる所以なり。則ち實際を穿て之を言へば、已を得ざるのことに屬すと謂ふべし。斯かる除外例は我邦女子敎育の方法に向て採用すべきにあらず。而して淑德を尙ぶ諸孃の必ず此の如き輕佻浮泛の陋說に動かされ、終生の薄幸を招ぐが如き過なきを望む。

晩近女子高等敎育の必要を說くものあり。女學の進步に就きて慶すべし。然れども其の程度及方法に至りては如何なる成算を有するか、聞かまほし。現今我社會は、未だ婚女子の獨棲を許さゝるなり、女子高等敎育の目的を貫徹せんと欲せば、少くとも先づ社會上の慣習を打破せざるべからず、我邦に於ては女子は一定の婚期を有し、芳紀

十七八より二十の間、之を良縁を求むるの期と爲す、而して若し此の期を失して既に二十前後を超過し、倘且つ獨棲良人に從はずんど、社會は陰かに之を嗤笑し、顧みて自己の子女を戒飾す。此の如く婚期を失するを以て深く耻辱と信ずるの慣習は都鄙遠近貴賤上下の別なく、牢として拔くべからず、故に今日に於て、女子敎育の實際上見るに足るべき効果を奏するは、小學時代の敎育のみ、小學を出でゝ高等女學校に入るものあるも、多くは他に嫁するが爲めに、半途退學するにあらずはど、其の克く課程を卒て、人の婦となる者も此の女學者は却て婦道を知らず、又家事整理の技倆に乏しく、人をして殆ど女子敎育の價値を疑しむ、是吾人一個の妄言に非ず、其の實際を腹藏なく吐露するのみ。女子に高等敎育を授くるの議や、太だ善、然れども我國の慣習に對し　又現今女子敎育の實際に徹し綿密周到の用意なくして、而して漫然として其の議を決せむ、其の弊や謂ふに忍びざるものあらん。抑當代に於ける、敎育ある婦女子の陋弊は、女子の本分は内庭を修め、力を子女の訓育に致すべきものたるを忘れ、漫りに男子の畛域に侵入して、男子的業務を割取するを以て所謂女權擴張と心得、女性の本分を恪守するの却て其の尊嚴と品位とを維持するものたるを知らざるにあり。女子が天賦の本性を自ら滅却して、男子と角逐し以て賢女顔するは、西洋婦人の陋態な

り、高等教育の主唱者にして若此點に留意するを怠るが如きことあらんか、折角の美擧も終に其の効果を收むる能はざるのみならず、品位高尙なる日本の婦女子を率ゐて、蜂腰轉婆の軍に誘ふに至らん、女子の高等教育をして、竟に白頭の老女書生洋冊を挾んで、「女子に參政權を與へよ」と絕叫するが如きに至らしむるなくんば、國家の幸なり。

今更、女子教育の主義を問ふなかれ、要は女子教育の方法にあり、聖詔炳として存す、如何にして之を我が女子教育の上に奉體して過失なからしむるを得べきか、意を致すべき所は此れ、教育家も、諸孃も。

女子教育一斑（四十六）

三輪田眞佐子

（ほど〳〵）にふしなかりせば呉竹の直きもたのむかひやなからむと、古人は歌ひけり。信にさる理なれど、女子教育につきても、女子の天分を考へずして、妄に空想を構へ、これを目的と定めつゝ。女子も男子の如く、世運の進歩と共に、高等の教育を施すべしと言はむか、恐るべき結果を招かん。

されど、おのれは、女子にも高等教育を施すべき道理を認ると同時に、その程度、及

び範圍を知るべき必要ありと思ふなり。蓋し人事にはつねに制限ありてこそ極端に馳する患なけれ、故に、今、女子高等教育の程度、及び範圍を定むるには、女子の天分を以て制限となさんには可ならんかし。

女子はその体質につきて、及びその心情に於いて、男子と著しき差異あるは說明を待たで知り得べし、從ひて、体育及び心育を旨とする教育につきて、男女おの〳〵類別あることそ天然の法なれ。況して女子には、人の妻たり母たるべき天分あるを以て、教育のためその天分を妨ぐるは非なり。すなはち、女子は和漢洋を問はず、その配偶の時期男子よりも早きを以て、修學の年限もこれに相應せでやはあるべき。既に嫁すれど、家政のため書をよむことを專なる能はざるべし、わきて兒童あるに至らむか、勉學の暇多きことを望むべからず。これを思ひ彼を考ふれど、女子高等教育の自然なる傾向知るべきなり。

これを以て、女子高等教育に於いて修むべき學科は、女子の天性に相當したるものに限るべし。且、これを學ぶ女子は、その一身の事情、女子固有の天識を果してなは餘力あるものに止るべし。然らざれど、勞しながら効なからむ。

先づ、音樂、美術、並に文學などは、女子の專攻すべきものと信せり。思ふに、女子

調和、及び優美など、おのづからこれらの技能に堪ふる特性を有するあり。わきてわが國文の傑作は、源語枕草子は更なり、種々の日記和歌など、女子の手になりしもの多し、などか今更その堪能につきて言ふに及ばん。

近來、醫學、及び理學なども、女子專門の學科に撰ぶも可ならんとの説あり。亦中等以下の教育事業は、女子これを行ふこそ適當ならめと唱ふるものもなしとせず。從ひて、女子高等教育に於いては、教育家となり得る學科を修むべきは勿論、その品格を養ふことも必要ならんとの意見を懷く人もあらん。

社會現今の情態より見れば、女子高等教育を勸むるにも、男子の帝國大學と同等なる高度の教育は行はれざるべし。故に、おのれは、女子尋常教育以上の專門教育を指して、假に女子高等教育と稱せしに過ぎざれど、讀者その心してよ。

まことや、女子專門教育につきて精細にものするは、本篇の目的にあらざるを以て、こゝに筆をとめつ。

終に一言せまほしきは、女子專門教育に伴ふ弊害は、單獨の生活にぞある。竹取物語に、この世の人は男は女にあふことをす女は男に合ふことをすその後なむ門も廣くなり侍るとあり。實に夫婦は人倫の始にしあれど、單獨の生活は天賦の理に背くものな

り。若、女子強て道を離れ、獨立せんか、天に從ふものは榮ゑんも、天に背くものは亡ぶる理勢に基き、處世上いみじき困難起るべし。されど、女子の孤存を期するものは、如何ばかり才學に秀んも、世範と仰がるゝに足らざるのみかは、一身の幸福を棄つるものとこそ言ふべけれ。

これを以てにや、女子自ら幼少より孤獨の生活を望むものは、をさ〱あらじ、唯家庭にあるころ、姑と嫁と睦じからざるを見て、われも異日他家に嫁がば、かゝる憂もあらんと恐れ、あるは酒色にふけりて道ならぬ行ある夫が、その妻を虐待する世の例に鑑みて、女子は一生獨立するこそ安逸なれと思ひ、あるは長じて學に志し、自ら高尚にして、最早身より劣等の男子に婚せずと誓ふも、その容色のため、將た年齢のため、適當の配偶者を得る能はざるより、斷然獨立を決心することもあらんなど、種々の原因より、本意ならざる境涯を送る女子もありとかや、決して學問のみの罪にあらざるべし。

凡そ人事は千差萬別の條件を滿足するにあらざれば成功せざるべし。今高等教育を受けんと企てん女子は、その能力、健康、資力、地位、及び家族の關係など、一切の身邊の事情を考へて、豫め成敗をトすべし。徒ら一時の感情に導かれて、奧ふかき學の

林に分け入らんか（花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるなかめせしまに）と歌ふ小町の末路に同情を表するかも知るべからざれど、女子高等教育を言ふもの謹慎せざるへからず。

虎穴に入らざれど虎兒を得る能はざる如く、女子高等教育は困難なるとゝもに、果して完全に成効せんか、國家を稗益すること鮮かなるべし。もし、學藝のみに長じて、男子めきたる異調の女子と變化せんか、人より虎に喰はれよかしと擯斥せらるべし。元來女子は、男子よりも比較上德行を重くすべきを以て、女子高等教育を受くるものは、これに相應したる女德備るべきなり。若、女德欠くることあらんか、その學藝は將に土芥と等しかるべし。



史談

荷田蒼生女

鹽井ふく子

德川時代の才女の一人とて、その名高き蒼生子の刀自は、つきねぶ山城の國稻荷のは

ふり荷田東麻呂翁の娘にて、在滿が妹なり。
父翁は敷島のやまと島根に契沖阿闍梨につぎて國學を再興したる大家にして、家風いと殊に、廣く海内を吹きなびかしたるのみならず、品行方正にして、當今和歌の風の淫靡に流るゝを憤り、生涯戀歌をよます、殊に志大にして、つねに門人たちに云ふやう、我が門に入るの人、我が云ふ言になづみて、我が說をのみよしと思ふべからず、學は遠く四海にさぐり、廣く古今に問ひ、其の正しきを考みわくべし、學は天下の物なり、師父の家の物と思ふは井の中の蛙のせまき思ひなりと云はれきとぞ。
さむかりやんごとなかりし父のみをしへをうけし蒼生女、如何でかあだし莠草とならん、生ひたつまゝに、色もかをりも他にまさりてめでたかりけれど、父なる翁も、母なる刀自もいたくめでいつくしみぬ。
東麻呂、もと、子と云ふものは、たゞ此女の子の蒼生女あるのみなりしかど、其甥在滿を入れて、兄と呼び、蒼生女を妹と呼ばせけるに、心もあひて、うつくしく、誠の同胞の如く親しみけり。されど、在滿、江戸に赴きし時も、蒼生女を伴ひぬ。蒼生女もまた兄に從ひ下り、偏にその心にまかせて、某氏にも嫁ぎけり。されど蒼生女、とつぎて幾はどもなく、まだ巳がみどりの色もかはらず、めでたき實のりもなき程に、

無常のあらしは、秋に先ちて吹き來り、はかなくも背の君を誘ひ行きしに、蒼生女はかなしく、なく〳〵兄の家にまた引きとられて、朝夕にかきくらしけるが、そゝしき心に涙をせきとめ、それよりはひとり書をのみ我が世の友とたのみ、父兄の志をのべて、偏に敷島の道の一筋をのみ求め、花にむかしのかをりを尋ね、月にいにしへの面影を忍ぶのみ、またあだし心をも起さず、ひとりぬる夜の床のつゆけさ、身にしむ小男鹿の聲も、たゞやまと言葉をよみ出すしるべと思ひなぐさみて、小夜衣重ねても着ず、起きては千代の古道ふるきを尋ねのぼり、いねてもいにしへのやまと言葉のあや〳〵をさぐり求めんと絶えず心をかけしものから、遂にくらぶの山のたど〳〵しきくまなく、おぼろの清水、おぼつかなからず汲み知り、和歌の浦のなみ〳〵ならぬ玉の言の葉をみがき得て、當時男の子にもたちまさるむかりの妙手となりし事、上下のものに聞えて、早く紀伊侯にめし出され、姫君が學びの師となりて、いとやんごとなく用ゐられけるが、身體やう〳〵おとろへ、病がちになりしかど、四十九の時、致仕してかへり、淺草のほとりに住みて、老をなぐさめけり。されど、なほ、諸侯の夫人、女公子たち、その學識をしたひて、なほ招きて敎を受けんとするもの多く、土佐侯、姫路侯、岡崎侯など殊にあつく禮する中にも、土佐侯はしば〳〵馬をむけ、車

とゞめ玉ふ事多く、或時は櫻山吹など折らせれこし玉ふとても

春雨の色やわせんと咲く花を手折りてもまづ君にとぞ思ふ

などの淺からぬ言の葉をそへれこし玉ふに、刀自も難有さにぬれまどひて

ぬれつゝも強ひて手折りし我が君が心の色を花にこそ見れ

など返せし事もありき。あるときは、また、其家のわたりを過ぐるとて

櫻花匂へるやどを如何にしてとはずや過ぎん春の道の邊

など云ひて、立ちより玉ふに、刀自いつもかたじけなう涙に墨をすりて、

ゆきずりの君が言葉の花の色に匂はぬ宿も春をこそしれ

などろめかへしゝためしいと多く、其の家集の杉のしづ枝の中に見ゑたり。かぞかりやんごとなく用ゐられし殿には、刀自もまた一際心を用ゐてつかへけり。刀自やうやうやせ行きて、なやみもはげしくなりまさりて、來ん春もまたぬ心地する折りから、此の侯の土佐へ行かせ玉ふに、刀自いつもよりは悲しみて、其頃好ませ玉ひける將棊の駒を、鹿の角して作らせ、金にて文字を入れたるを調じて、心ことにしめたる香箱に入れて、侯に贈り奉れるにそへし歌にも

うち捨てて君は行くともわかれ路をしたふてゝろの駒はれくれじ

歌も、しくみも、いとめでたく、才ある事なりかし。なほ、其他、もゝの諸侯方、父翁の教へし子、兄君の友など、玉かづらのたゆる事もなくとひ來りぬ。かの縣居の翁、眞淵も、父翁の御弟子にて、やんごとなき中なりしかど、從つて其弟子たちもむつび、行きかひしげく、月雪の友の外にもまた歌をなぐさむるふしぶし多かりき、かつて縣居翁の弟女、牧子より、つくづくしを、いさゝか包みて、

霞たつ野邊に心をつくしてしわがたの春のしるべばかりを

などそへてこせしに

折りてこし心づくしを見るからに縣の春も君もゆかしき

刀自もをかしき心に、折りかへしぬるもいといたき心やりならんかし。天明の六年、六十路あまり五とせをつみて、遂にみまかりはてぬ。亡きがらは淺草金龍山の奥深く葬られ、碑さへたてられて、其功長く石ぶみにほりつけられぬ。

（未完）

孝婦いま女がこと

五十園徳文

いま女は大和國の竹内村の人なり。夫みうせてよりみさををまもりて、やもめにて一生をおくれりき。舅ありけるに事へて定省いさゝかもおろそかならず至孝のほまれた

かゝりき。男疾に臥して、ものくはざること十日あまりになりて、身いたくおとろへたるに、一日やまひすこしおこたりて、鯉魚を食まほしといふ。いま女いかにもしてこの魚を得んとおもへども、山里なれば、得るにすべなくて、困じ居たりしに、夜になりて、厨にありし甕のうちにしきりに水音のしけるに、あやしみて見れば、鯉魚その中にありて躍れるなりけり。いたくよろこびて、煮て男にすゝめき。やがて男の病も愈にけれど、人みなこのあやしきしるしには、至孝の徳なりけりとて感じあへりきといふ。芭蕉翁もこれを聞きて、ふりはへてゆきとぶらひて。感涙にむせびきゝといへり。このことの年月くはしくはしるべからねども、芭蕉庵の在世のころなれば、今よりは二百年ばかりの昔のことなり。

編者曰このいま女が傳はさきに第百三十五號に高角山人のものしたるあり、印刷の後にて心づきたれど今は改むるにすべなければ此のまゝにのせつ。讀者其の心してよ。

人のよはつゆなりけりさ
しりぬれば親子のみちに
こゝろおかなむ

（源實之）

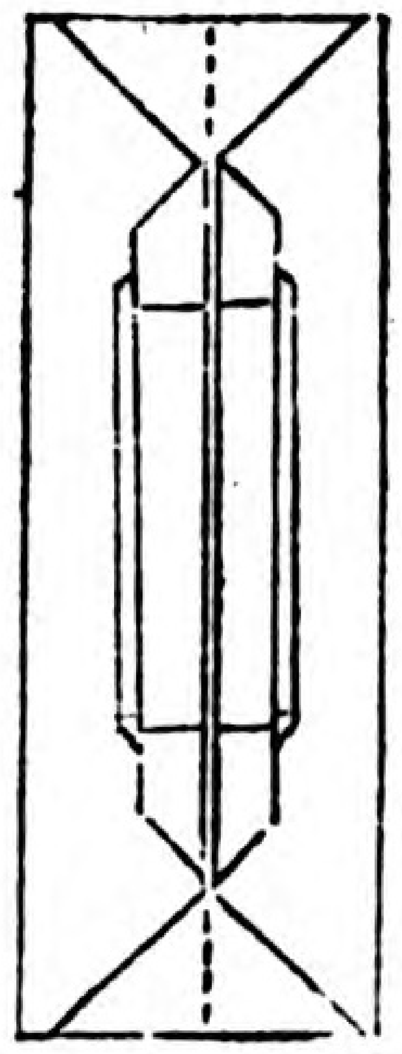


折形

有住齊

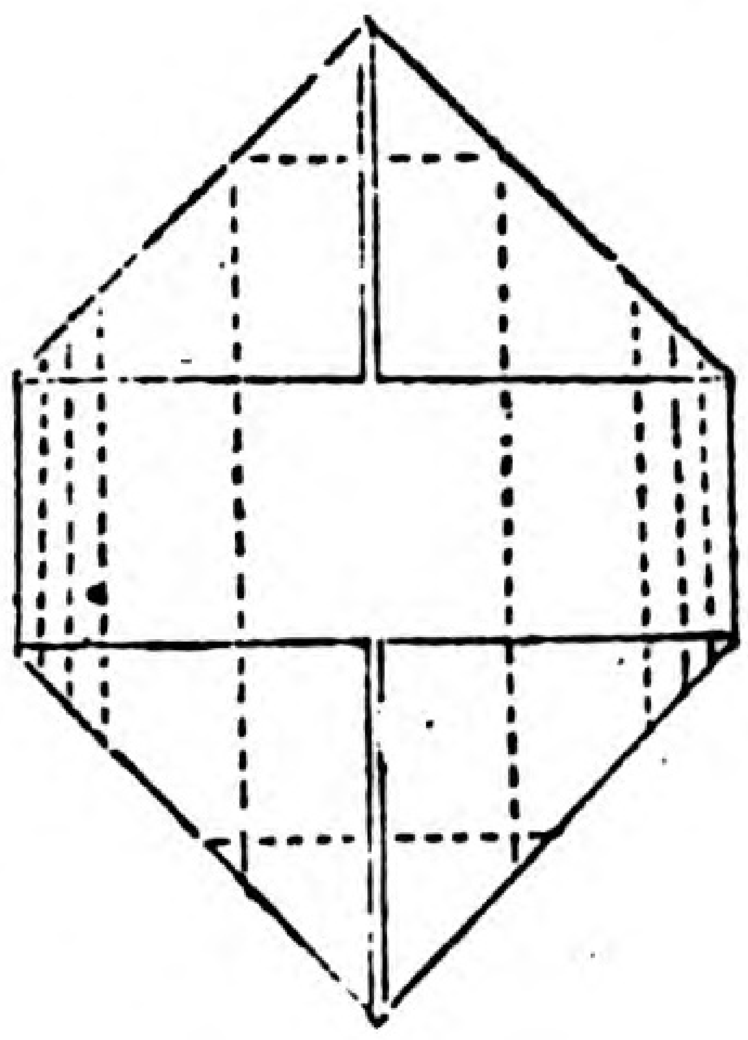
柄糸絛緒包

かきつけあり、下包なし。

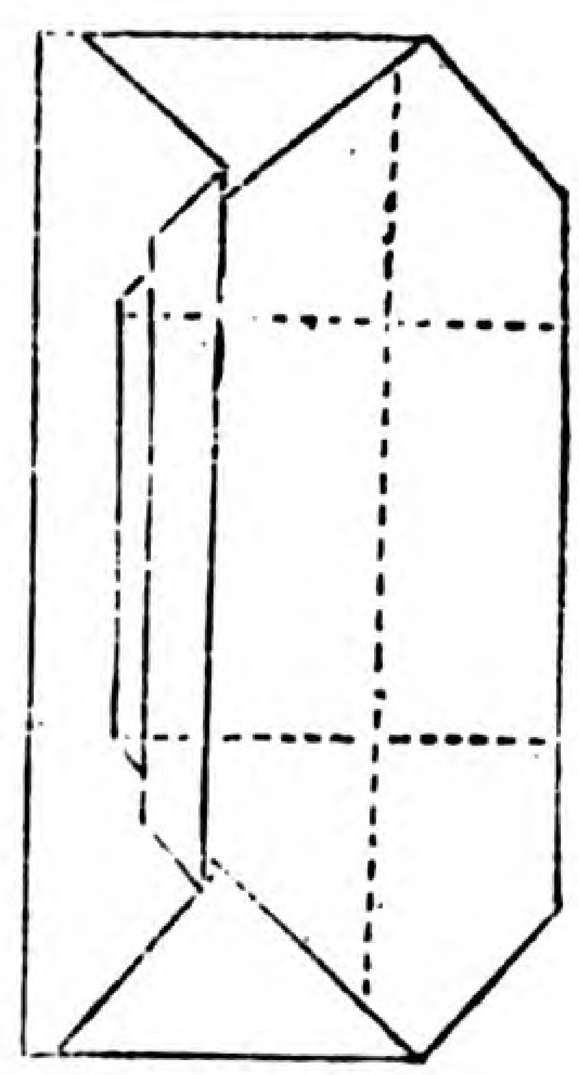


水引かくる

仝解の一

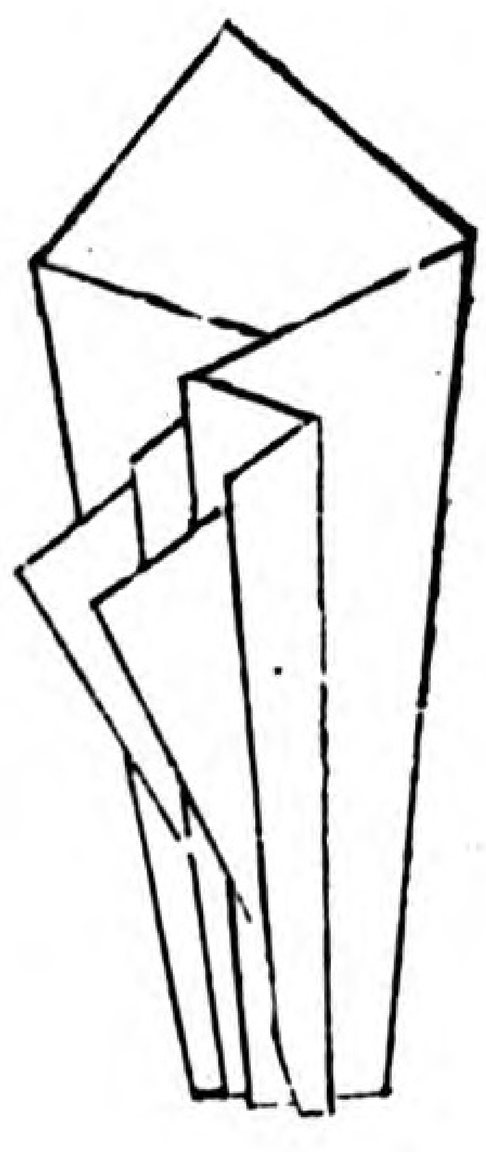


仝解の二



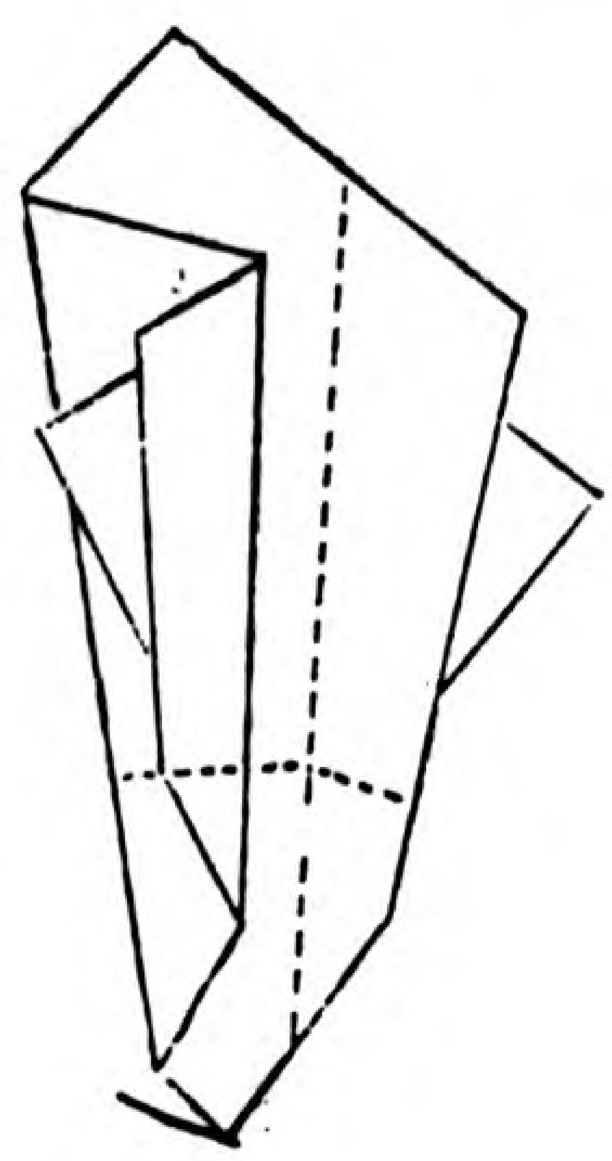
眞末廣包

扇子包のごとし。



水引のみ

仝解



茶の湯

割稽古（續）

關葦雄

扨右手にて茶筌を取、茶碗へ横たへ、穗先を入る、拇指人差指二本にて持ち居り、中指以下三本を伸し、茶碗の向の縁へ掛て茶筌を放し輕く音有樣にする、直に手を返し、拇指を上に見て前の如く持茶筌を引上け、中央にて止り（大約引上る程度八寸位迄）腕にて前の方へ廻し、（此廻す手付は腕より手の裏の方上に見る迄廻し）茶筌の穗先を見るべし（是は茶筌の穗先折損し又芥塵のかゝるもの有を調査し若折損し或は付たる物あらは是を左の手にて取拔こぼしへ入るへし）直に下にさかり、穗先を茶碗へ入、又初の如く三本の指を茶碗の縁へかけ、殘る二本を放し、縁と茶筌と微音ある樣にすべし、（是を茶筌を打さ云）如斯する事四回の後、茶筌を持、茶筌を茶碗の中にて振廻すべし、（是は始靜に後早く又靜になりて止茶碗の中に丸のの字を書心得也）靜に成て止り、左手の茶碗を持たる手を膝の上に引、茶碗の中より茶筌を引上、倒にして、棗と置合、右手にて茶碗を持、左手へ移し、湯を建水へ捨、又右手へ茶碗を移し、前に置、右手にて茶筌を取、直に茶碗へ入、左手も出し茶碗を持、茶筌を濯き、初め靜に、後早く、再靜に成て止まり、茶筌を横たへ、茶筌湯治の時の如く放打すべし、（此時も微音有やうにす）後引上げ見て打事二回、直に四五回ふりて止まり、左手を膝の上に引、茶筌を引上げ棗と置合、茶碗を右手に取て左手へ移し水を建水へ捨、又茶碗を右手に持、前に置、茶筌を右にて取茶碗の眞中へ眞直に入、（此時茶筌の軸茶碗の前の縁へかゝる）右手にて茶杓を持、膝の上に控へ、左手にて帛紗を腰より取、左の膝頭の邊迄出し、右手の茶杓を握込（此時は右手紅指以下二本の指にてもつ）殘三本の指にて左手

の帛紗上の角一つを持、引立疊み、左手の掌中に置、右手の茶杓を帛紗の上へ乘せ、左の手の栂指にて帛紗を折込、茶杓を拭ふ事三篇（但手胎平さ三篇）帛紗の中にて茶杓を俯せ（是時は右の方より左の方へふせる）帛紗の中より出し、（但此時帛紗の折目一旦開き茶杓を出し又折目ふさかる樣にすへし）茶碗へかけ（但茶筅は茶碗の眞中茶杓は又その眞中になるやうに掛る）左手の帛紗を其儘握り込み、栂指と人差指にて縁を些少下け、右手を出し、左手の帛紗の口を明け、縁の上にて茶の固着したるを輕く二度程に打落すべし、而して後帛紗を一つ打返し、上の角を取、引立、左右の手にて引延し、二つに折て左手に移し腰に付くべし、扨右手にて棗を持、最初置きたる所へ置付、直に右手にて茶碗を持、左手を添、右手を茶碗に淺く（但し茶杓掛たる際を持扱ふへし）掛持、棗と置合すべし。如斯するを割稽古の一篇とす。其後帛紗を帶より取疊み仕舞ふべし。此手續を能覺ね暗記して後釜の前に向ひ一服の薄茶を點る手續に掛るべし。

編者曰、此割稽古は頗る困難なるものなり、師も弟子も不耐場合あり、如何となれば、素より湯も茶も水も入るに非ず、所謂間似事なれば、幼童の戲に近く、面白からぬものなり。雖然是を勤めざれば、薄茶一服の實地に至り、幾層増加して煩雜を極むるものなれば、丁寧反覆して是ら勉むべし。

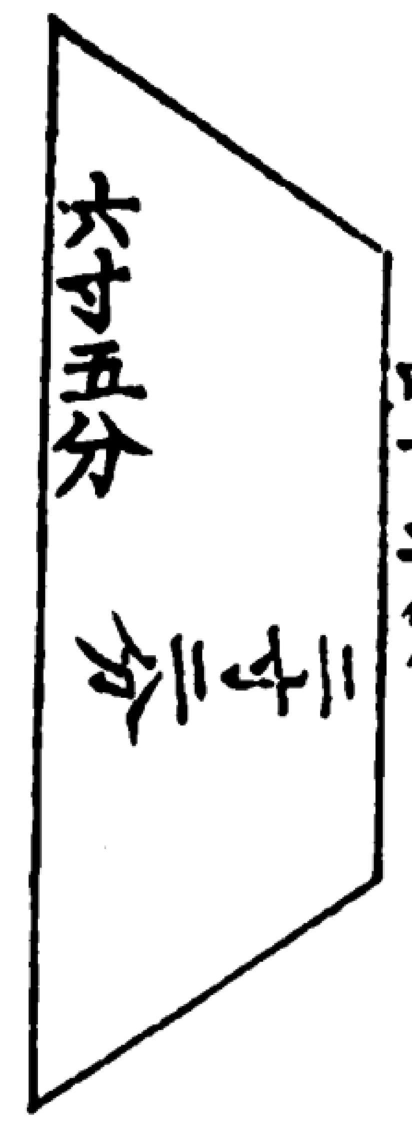
たちぬひ

西山たい子

（七十五）袴のぬひ方

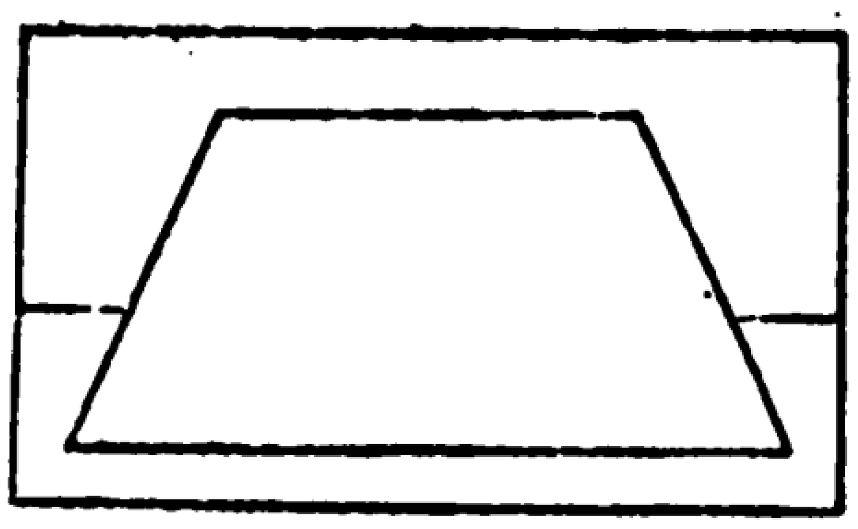
まづ前紐をはぎて、眞中を一尺ばかりわけおきて他

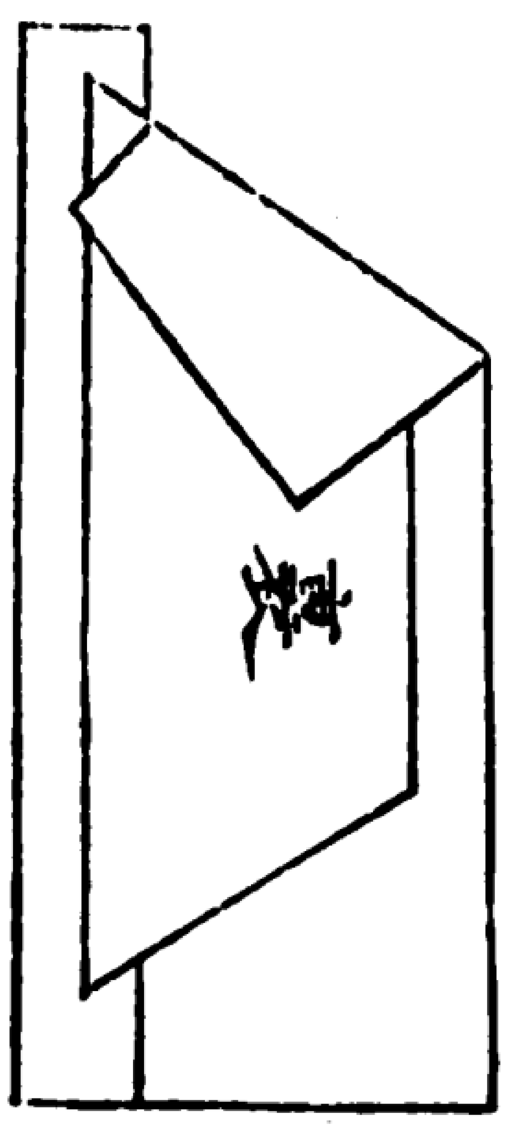
をも悉く絎けるべし、また後紐をも片隅を八分ほどかりあけおきて、他を二つながら絎けおくべし。それより腰板を作りおくなり、板は、厚紙、いため紙、または杉折のふた等にて、その厚さを見はからひ、一重、二重、三重、幾重にてもよろしきほどにはり、



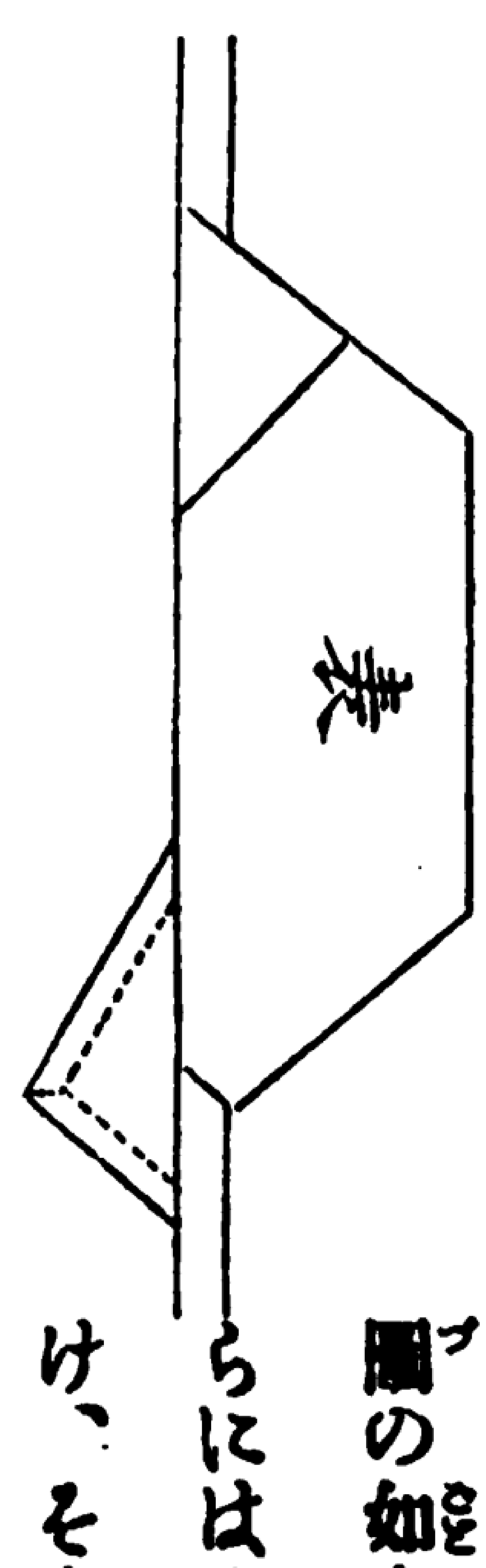
圖の如く裁ちかんせんよりをよりて、

圖の黒くひきおる條の所にのりもてつけ、（但表の方）表の切をとりて、のりにて圖の如くはりつけ、その板の外に出でたる布のはしに、つけおるきつかけに、きり目を入れて、その布のはしに圖の如くして折りかへし、

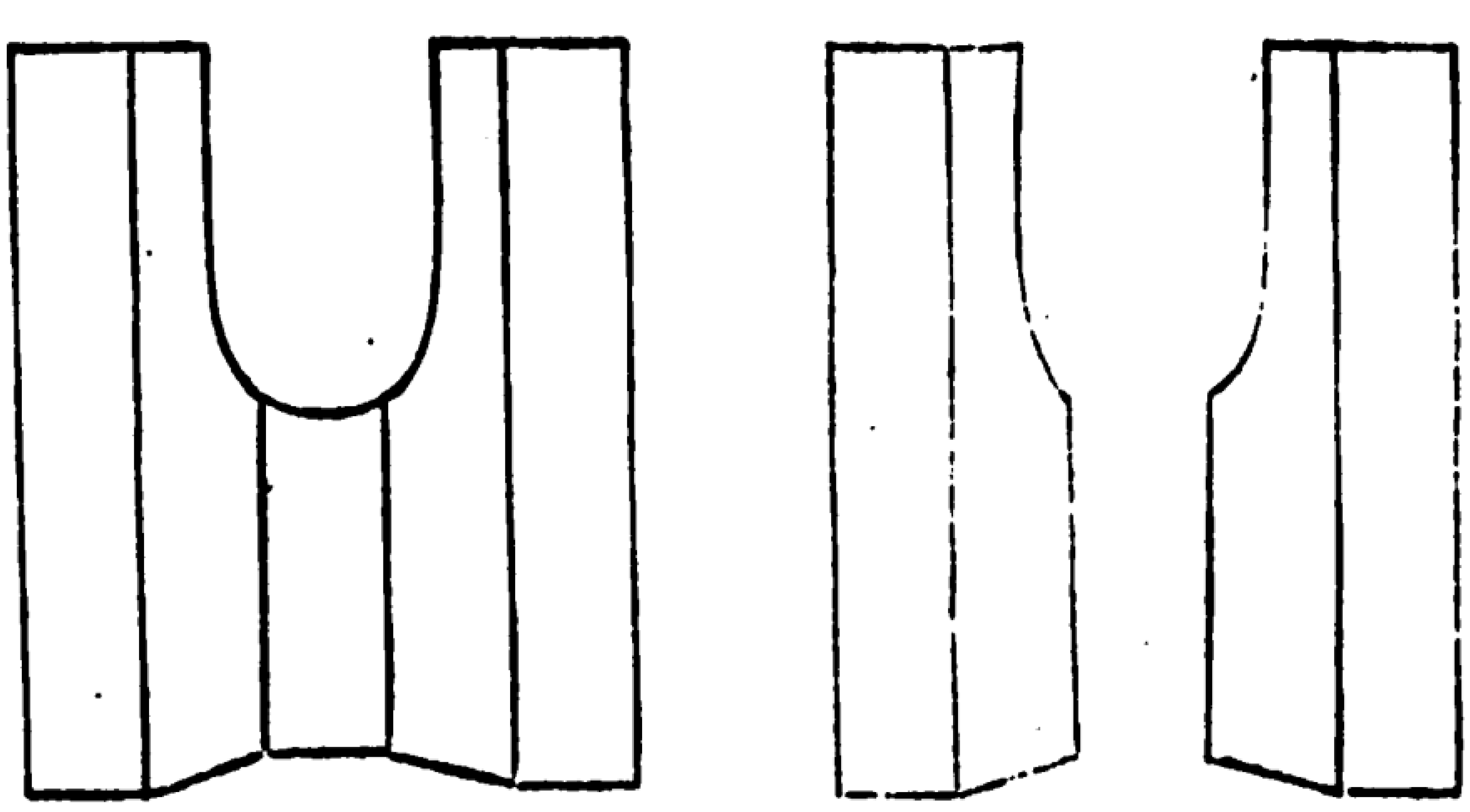




のりにてはりつけ、後紐のあけおる間に、板のはしを少しくはさみて、糸にてとぢつけ、せみ切を折りて、圖の如くうらにはりつけ、そりの出でぬやうになしおくべし。



さて、それより圖の如く、後の奥布へ、後の脇切をはぎ合せ、また圖の如く前奥に、前の脇切れをはぎつけ、そのはぎたる前奥に、圖の如く、襠の一片をぬひつけ、その一片を後の奥布にぬひつけ、前脇と、後脇とを袋の如くにして合せ、脇の上の



方を少しくあけおきて、下の方を一尺五寸ばかりぬふべし、そのぬひたる處を相引と云ふなり。左右ともにその如く袋になし、裾ぐけをすべし。あまりに長ければ、今回は之れにてとめおきて次回にゆづるべし。

造花

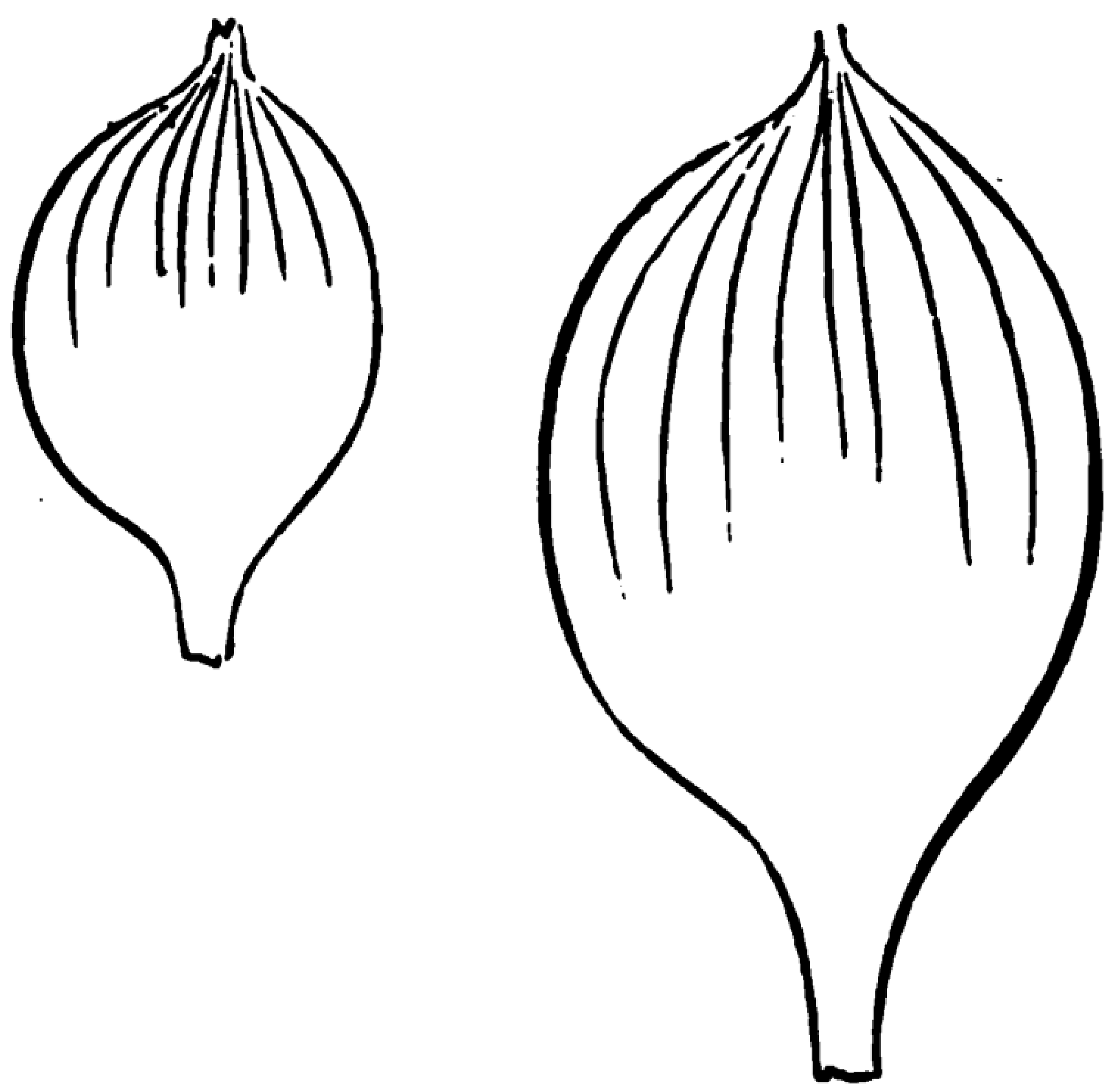
共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

蓮華

滿開花　花瓣は、絖又は寒冷紗、共に薄糊を引きて用ゆ。はせめ布を第九十一圖の如く甲乙二種の形に斷ち、（一つの花に甲十二枚と乙六枚とを用ゆ）白色のものを造るには其の儘。紅のものは、甲の花瓣をそめ、「ローザミン」にて元を薄く先の方濃くぼかしにそめ、乙の花瓣は先を「ローザミン」にて赤くぼかし、

第九十一圖

甲　乙



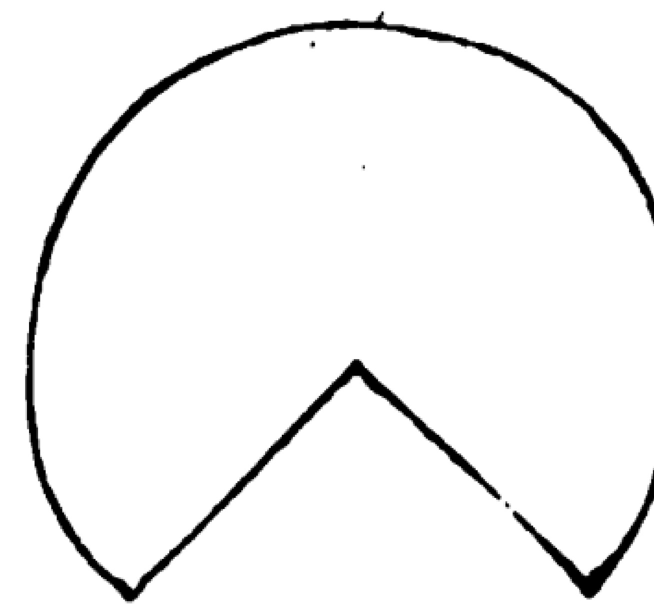
元は「オウラミ」、「グリン」等分にあはせ溶きて極く薄く青黄色にぼかし、之を生乾となして、布を疊みたる上に瓣の裏を上にして載せ、薔薇鏝にて中央よ

り元の方を凹まし、先端を細くし、后、菊の二筋鏝にて瓣の内部より實物の如き線條を施すべし。

葉は はじめ、畫用紙を「グリン」と「オウラミ」を等分に混せて染め、花の大小に應じ適宜の大さを計り、第九十二圖の甲の如き形に切りて、此切りたる處を

第九十二圖

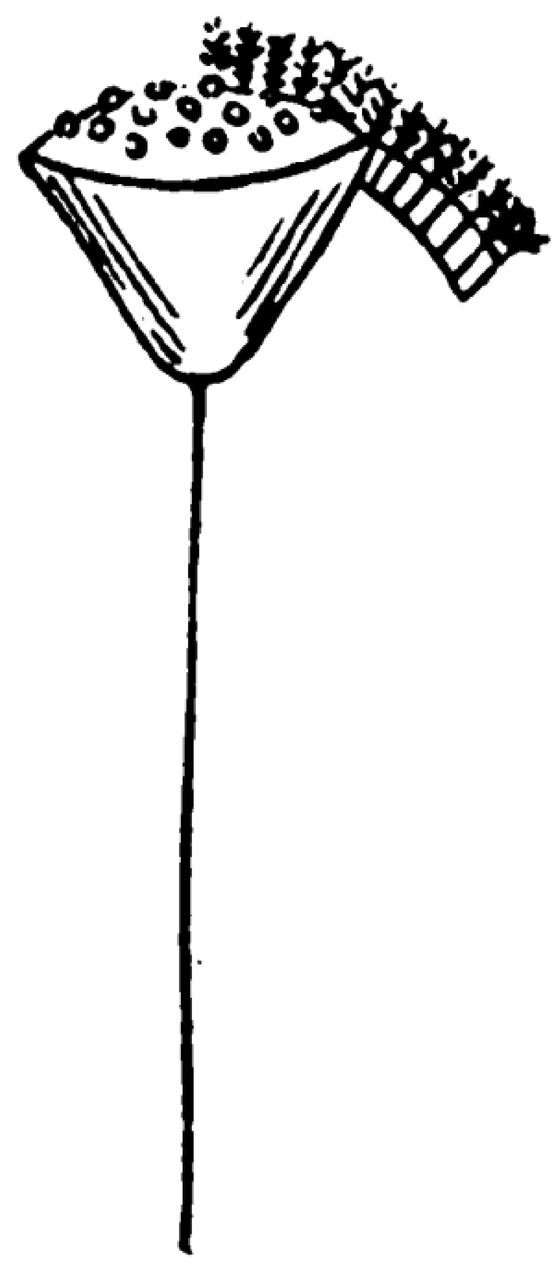
甲



乙



丙

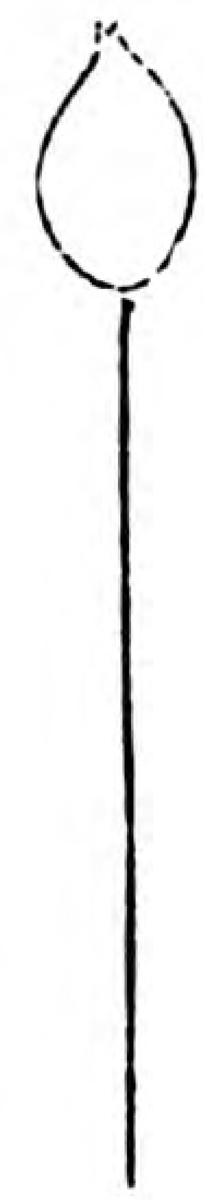


糊にて積ぎ合せ、漏斗の形となし、又針金の先を曲げてその中央に通して軸となす。猶別に全し色にそめたる畫用紙を適宜の丸さに切り、その面に裏より錐にて適しきぐはりに穴をあけ、前に造りし漏斗なりの上に合せ、合せ目を細き青紙にて着ぐへし。さて、別に太きカタン糸を適宜の長さに數十本を切り、その先のはし。五寸より一尺ばかりに糊をつけ、之に麥焦、又は糠に「オウラミ」を混せたるものを付着せしめ、第九十二圖の乙の如く青紙に貼り付け、之を前の造りれきしもの丶まはりに第九十二圖の丙の如く糊にて着くべし。斯くの如くして后、前の花瓣の甲三枚を宜しき配りに此の葉の廻りに着け、又その間に甲三枚をつけ、漸次斯の如くして甲十二枚を着け終りし后、乙の花瓣六枚をまはりに配り着くべし。莖は針金の眞によろしき太さに綿を卷きつけ、上に青紙を卷き付け、倘其の上に蠟粟を青くそめて

糊にて着くべし。

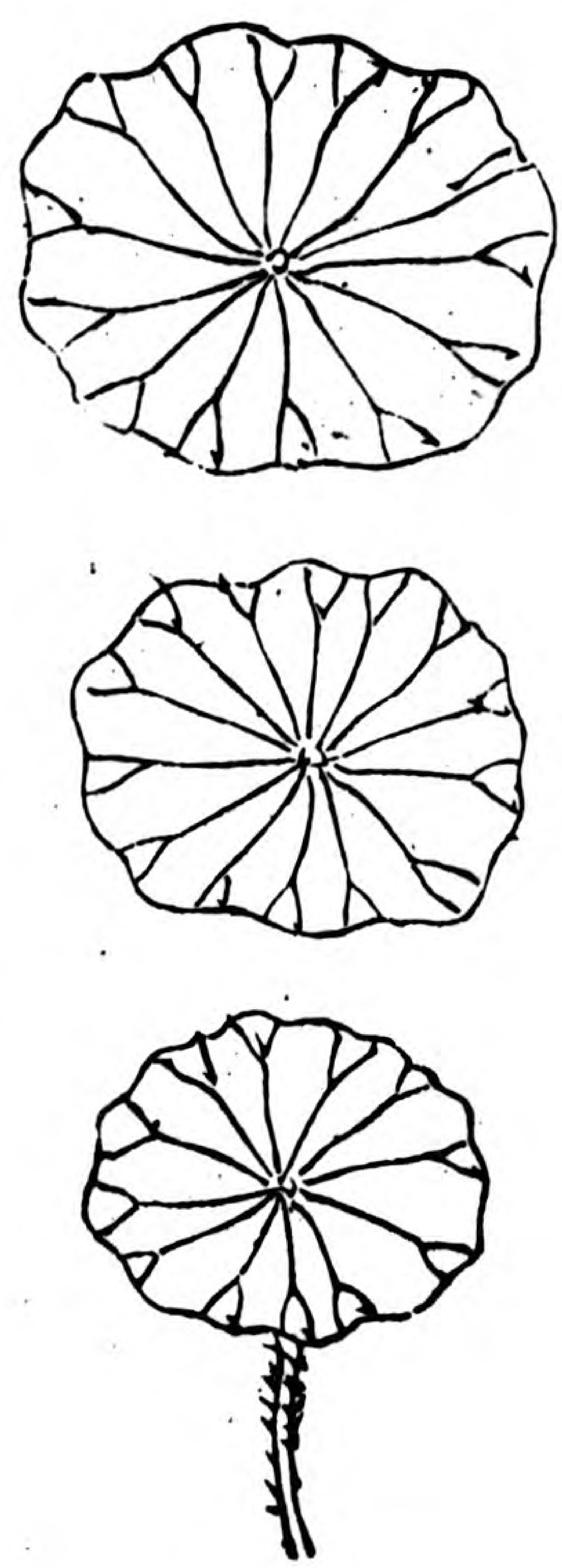
蕾は　針金の先に第九十三圖の如く綿を巻きつけ、之に乙の花辨のみ六枚を着くるなり。

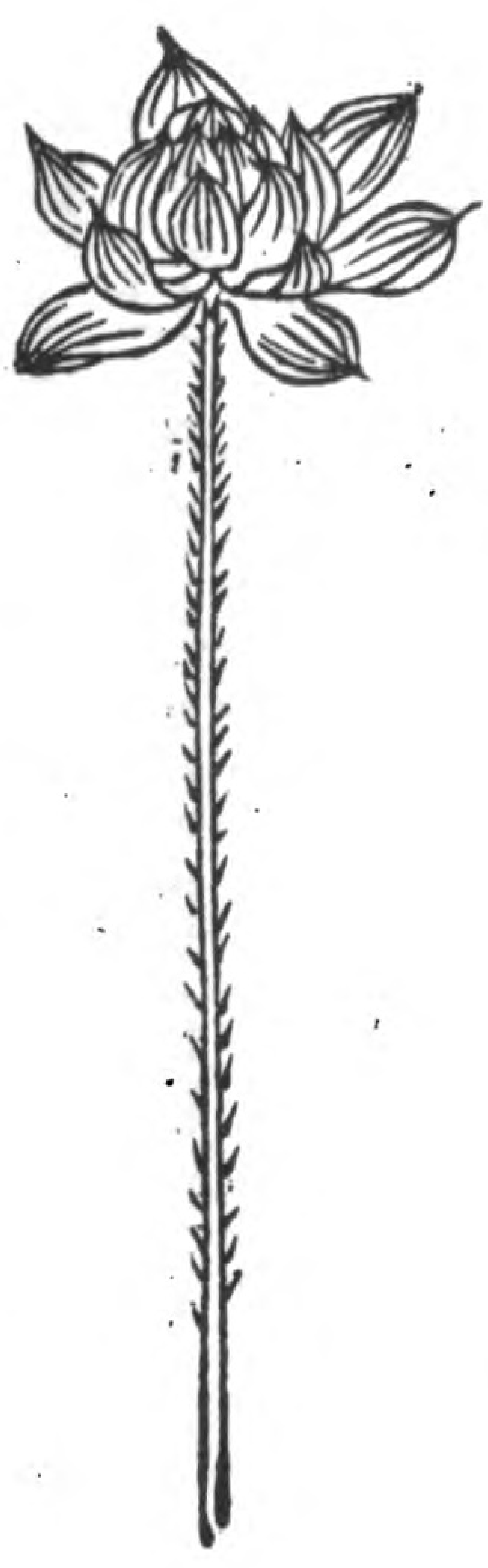
第九十三圖



葉は　寒冷紗を、「グリン」と「オウラミ」にて染め、第九十二圖の甲の如くして切り込みを極く狭くつくり、此の切り込みを糊にてつぎ合せ置き、別に細き針金に青紙をまきて二本づゝ、その先を四五分ばかりのこして其處より一處に又青紙を巻きつけ、かくの如きもの六七本を合せ括り、之を平らになしてその裏表より前につくりし丸き寒冷紗を貼り着くべし。第九十四圖の葉參照、莖の造り方は花の莖と全じ事なり。

第九十四圖







だいどころ

豌豆スープ

豌豆「スープ」に、肉入「スープ」と、並「スープ」の二種あり、左に記す。

肉入豌豆「スープ」を製するには、先づ一斤の生豌豆、牛肉、又は鶏肉半斤を骨附のまゝ骨を砕き、能程にきり、「スープ」鍋に投れ、水一升二合を投じ、豆を能く洗ひ皮を去り、之れに、能程の食鹽を加へ、火に懸け、沸騰を待ちてかすをすくひとり、球葱二個、胡蘿蔔一本、蕪等一本を細かに刻み、之れに火腿二十匁を加へ、三十分間程蓋せずに煮、かすの浮きたる毎に網杓子にてすくひとり、三十分を經たる後鍋に蓋をなし、三時間程文火にて煮るべし、但し豆は焦つき易きものなれば、時々蓋をとり焦附かぬよう注意すべし、斯して、煮ること三時間に至りたれば、一旦火よりおろし、水嚢にてこし、豆の中よりかすを取去り、復元の如く、「スープ」と共に鍋に戻し、能程の胡椒、食鹽を加へ、更に五六分間煮たる後皿に盛り、燒麵包少量を骰子目にきりて、其中に投れ、成べく冷えざる中に用ふべし。

並豌豆「スープ」は、先づ二斤の豆を能く洗ひ、皮を剝きて二つに割り、火にかけたる「スープ」鍋に大匙二杯の牛酪を落し、之れに、前の豆を投れ、四五分間煎付かぬやう能くかきまぜて煮たる後、水一升七合を注し、其沸騰つを待ち、浮たるかすを去り、球葱二個胡蘿蔔、蕪菁各一本を細かに刻みて「スープ」の中に、投れ、食鹽にて味を附け、豆は十分軟かになり、「スープ」は濃くなるまで更に二時間程煮たる

後、流して用ふべし。



學園

秀歌集（四）

鹽井ふく子

柿本朝臣人麿羇旅歌八首の中

あまざかるひなのながぢゆこひくれば
　　あかしのとよりやまと島見ゆ

○あまざかるざかるはへだつる事にて、はるかに遠く離れたるを云ふにて、都より鄙を望めば、天と共に遠くはなれて見ゆる故に、鄙にかけて云ふなり○鄙のながぢゆ、鄙は都に遠き所をすべて云ふなり、長路はながき路、即ち遠き路と云ふ事にて、長旅の意なり、ゆは「より」の古言なり○こひくれば「戀ひつゝくれば」と云ふつゝをはぶきしにて、まだか／＼と戀ひつゝ來ればなり○あかしのとより明石のとまりよりと云ふ事にて、明石は播摩の國にある名所なり○やまと島見ゆ、大和秋津島を畧してやまとじまと云ひしにて、大和の國が見ゆると云ひしなり、此ころには、大和が都なりしなり。

○一首の意は、都に遠ざかりをる處の遠き鄙より旅して、都にいつつくか、いつつくかと戀ひつゝくれば、明石のとまりからやう／＼倭島根が見ゆる、かくては、もうぢき都につかるゝであらうとの意にて、長き旅路のそら、おぼつかなくながめつゝ、都を早くと戀ひわびしそらに、やう／＼見えしを

飛び立ちてよみしさま、さながら心をも入れずして、云ひしやうなるが中に、いみじう氣色も心もこもりてあはれなる歌なり。

柿本朝臣人麻呂從二近江國一上來時
至二宇治川邊一作歌一首

ものゝふの八十氏河のあじろ木に
いざよふなみのゆくへしらずも

○武士の、やそにも、氏にもかくる枕言葉にて、八十にかけて云ふは、武士は幾氏もあれぞよりなり、八十とは、數の多きをいふなり。うぢにかけたるは、うぢはいづと同じにて、いちはやき事を云ふ故なり、此處にては、八十氏にかけて云ひしなり○八十氏川の、宇治川に、八十を冠らしたるにて、八十は別に意あるにあらず、たゞ宇治川と云ふべきを、調よくよみかつ宇治を氏にかけ云ひしなり、あじろ木に、氷魚といふ魚を捕らんために、冬の頃、ひの木、竹、あし等にて、あみの目のやうにくみなしたるあじろと名くるものを、河の中に張らんために、あまたうちこみたる杭を云ふなり○いざよふ浪の、いざよふはたゞよふ、よどむ、とゞまるなどの意にて、あじろ木に浪のせかれて、速にながれず、しばらくとゞまり見ゆると云ふなり○行方しらずも「ゆくへも知らず成りゆく」と云ふ意にて、もは咏嘆の意をあらはせるなり。

○一首の意は、宇治川の中に、うちこんである數多のあじろ木に、たゞよひとゞこふる浪の、遂には何處へ流れてゆくか、行方も知れなく成つてしまふ、人生も、また、此の浪のやうのものにて、八十氏のあまたの人々が、しばらく世にためらひ

とまるほどに、いつのまにか、みな何處にか消ゆ行いてしまふ、誠に世の中は、無常な變り易きものであるとの意なり。誠に調も高う、全韻いとめでたき歌なり。

長忌寸奥麿歌一首

くるしくもふりくる雨かみわが崎
佐野のわたりに家もあらなくに

○くるしくもふりくる雨かのかは、「かな」のなをはぶきしにて、歎息の意なり。アー、〳〵、くるしくもふりくる雨ではあるわいとの意なり○みわが崎、紀伊の國牟漏郡にある神が崎にて、新宮より那智へ行く海邊路なり佐野のわたりに、佐野は、其神が崎のつゞきにて、熊野神邑に至る處なり、渡りは此所のは舟して渡る渡なり○家もあらなくに、「家もありはしないのに」なり。

○一首の意はアー、〳〵、くるしくもふりくる雨ではあるわい、神がさき、さぬの渡りなどには、家もありもしないのに、心なく雨はふりて、我をむくるしめぬらさするよとの意なり。みわが崎は、大和の三輪なりと云ふ人あれど、三輪には、崎もなく、また、そのほとりに佐野と云ふ所のあるも聞かず、且つ之は　持統天皇の御代の人の歌なれど、此頃には大和が都故、其都近き所に家もあきむかりのわびしき旅の意をよむべき筈なしと、契冲も云ひけり。げに、さる事にて、之は紀の國の神が崎なるべし。

柿本朝臣人麿歌一首

あふみの海夕浪千鳥ながなけば
心もしぬにいにしへおもほゆ

○あふみのみ、近江の海なり○夕浪千鳥、夕べの

浪にたちさわぐ千鳥をかく云なり○汝がなけば、「阿前がなけば」なり○心もしぬに、しぬは、「しの」にて、しのをつく雨など云ひて、しどゝにぬるゝ意なり○いにしへおもほゆ「むかしが思はれる」との意なり。近江はむかし天智天皇の御代には皇居のありし處なり。

○一首の意は、むかしは、此處の近江の國に、皇居がありて、いたくにぎはひたりしが、今は皇居も轉して淋しく、さらぬだにむかしの忍ばれて涙ぐまるゝを、此の近江の海の夕なみに、さわぎなきたつ千鳥よ、阿前がなけば、いよ〳〵むかしが忍ばれて、かなしく、心までしどゝに露がみちて、古人が忍ばれてこたへられぬとの意にて、言葉も心もいとあはれにやさしく、よむ袖さへいとゞ露けくおぼゆるなり。



雨月物語

貧福論

故人　上田秋成

陸奥の國、蒲生氏郷の家に、岡左内といふ武士あり。祿おもく、譽たかく、丈夫の名を關の東に震ふ。此士いと偏固なる事あり、富貴をねがふ心常の武扁にひとしからず。儉約を宗として家の掟をせしほどに、年を疊て富昌へけり。かつ軍を調練す間には、茶味翫香を娛しまず、廳上なる處に許多の金を布班べて、心を和さむる事、世の人の月花にあそぶに勝れり。人みな左内が行跡をあやしみて、吝嗇野情の人なり

とて、爪はじきをして惡みけり。家に久しき男に黄金一枚かくし持たるものあるを聞つけて、ちかく召ていふ、崑山の壁もみだれたる世には瓦礫にひとし、かゝる世にうまれて弓矢とらん軀には、棠谿墨陽の劍さてはありたきもの財寶なり、されど良劍なりとて千人の敵には逆ふべからず、金の徳は天が下の人をも從へつべし、武士たるもの漫にあつかふべからず、かならず貯へ藏むべきなり。爾賤しき身の分限に過たる財を得たるは嗚呼の事なり、賞なくむあらじとて、十兩の金を給ひ、刀をも赦して召つかひけり。人これを傳へ聞て、左内が金をあつむるは長嘯にして飽ざる類にはあらず、只當世の一奇士なりとぞいひはやしける。其夜左内が枕上に人の來たる音しけるに、目さめて見れば、燈臺の下に、ちひさげなる翁の笑をふくみて座れり。左内枕をあげて、こゝに來るは誰、我に粮からんとならば力量の男どもこそ參りつらめ、爾がやうの耄たる形してねふりを魔ひつるは、狐狸などのたはむるゝにや、何のればえたる術かある、秋の夜の目さましに、そと見せよとて、すこしも騷ぎたる容色なし。翁いふ、かく參りたるは、魑魅にあらず人にあらず、君がかしづき給ふ黄金の精靈なり。年來篤くもてなし給ふうれしさに、夜話せんとて推てまゐりたるなり、君が今日家の子を賞じ給ふに感て、翁が思ふこゝろばへをもかたり和さまんとて、假に化を見はし侍るが、十にひとつも益なき閑談ながら、いはざるは腹みつれば、わざとにまうでゝ眠をさまたげ侍る。さても富て驕らざるは大聖の道なり、さるを世の惡ことざに、富るものはかならず慳し、富るものはおほく愚なりといふは、晋の石崇、唐の王元寶がごとき、豺狼蛇

猾の徒のみをいへるなりけり。往古に富る人は、天の時をはかり、地の利を察らめて、おのづからなる富貴を得るなり。呂望齋に封ぜられて民に產業を敎ふれど、海方の人利に走りてこゝに來順ふ、管中九たび諸候をあはせて、身は陪臣ながら富貴は列國の君に勝れり。范蠡。子貢。白圭が徒、財を鬻き利を逐て、巨萬の金を積なす、これらの人をつらねて貨殖傳を著し侍るを、其いふ所陋とて、のちの博士筆を競ふて謗るは、ふかく察らざる人の語なり。恒の產なきは恒の心なし、百姓は勤て穀を出し、工匠等修てこれを助け、商賈務めて此を通はし、おのれ〳〵が產を治め家を富して、祖を祭り子孫を謀る外、人たるもの何をか爲ん。諺にもいへり、千金の子は市に死せず、富貴の人は王者とたのしみを同じうすとなん、まことに淵深ければ魚よくあそび、山長ければ獸よくそだつは天の隨なることわりなり。只貧しうしてたのしむてふことどもありて、字を學び觀を探る人の惑をとる端となりて、弓矢とる丈夫も富貴は國の基なるをわすれ、あやしき計策をのみ講練て、ものを破り人を傷ひ、おのが德をうしなひて子孫を絶は、財を輕んじて名をおもしとする惑ひなり。願に名とたからともとむるに心二ある事なし、文字てふものに繫がれて、金の德を輕んじては、みづから清潔と唱へ、鋤を揮て棄たる人を賢しといふ。さる人はかしこくとも、さる事は賢からじ。金は七のたからの最なり。土に瘞れては靈泉を湛へ、不淨を除き、妙なる音を厳せり。かく淸よきものゝ、いかなれど愚昧貪酷の人にのみ集ふべきやうなし。今夜此憤りを吐て年來のこゝろやりをなし侍る事の喜しさよといふ。左内興じて席をすゝみ、さてしもか

たらせ給ふに、富貴の道のたかき事、己がつねにおもふ處露たがはずぞ侍る。こゝに愚なる問事の侍るが、ねがふは詳にしめさせ給へ、今ことわらせ給ふは、専金の德を薄しめ、富貴の大業なる事をしらざるを罪とし給ふなるが、かの紙魚がいふ所もゆゑなきにあらず、今の世に富るものは、十が八までは、おほかた貪酷殘忍の人多し、おのれは俸祿に飽たりながら、兄弟一屬をはじめ、祖より久しくつかふるものゝ貧しきをすくふ事をもせず、となりに栖つる人のいきほひをうしなひ、他の援けさへなく世にくだりしものゝ田畑なども、價を賤くして、あながちに己がものとし、今おのれは村長とうやまはれても、むかしかたりたる人のものをかへさず、禮ある人の席を譲れで、其人を奴のごとく見おとし、たま〳〵舊き友の寒暑を訪らひ來れど、物からんためと疑ひて、宿にあらぬよしを應へさせつる類あまた見來りぬ。又君に忠なるかぎりをつくし、父母に孝廉の聞えあり、貴きをとふとみ、賤しきを扶くる意ありながら、三冬のさむきにも一裘に起臥し、三伏のあつきにも一葛を濯ぐいとまなく、年ゆたかなれども朝に晡に一碗の粥にはらをみたしめ、さる人はもとより朋友の訪らふ事もなく、かへりて兄弟一屬にも通を塞れ、まじはりを絶れて、其怨をうつたふる方さへなく、汲々として一生を終るもあり、さらばその人は作業にうときゆゑかと見れば、夙に起おそくふして性力を盡し、西にひがしに走りまどふ躁蹉さらに閑なく、その人愚にもあらで才をもちうるに的るはまれなり。これらは顔子が一瓢の味はひをもしらず、かく果るを佛家には前業をもて說しめし、儒門には天命と教ふ。もし未來あるときは現世の陰德善功も來世

のたのみありとして、人しらくこゝにいきどほりを休めん、されど富貴の道は佛家にのみろの理をつくして、儒門の教へは荒唐なりとやせん、靈も佛の教にてこそ濟せ給ふらめ、否ならは詳にのべさせ給へ。

（未完）

浮世いかた舟

作者不詳

●天王寺まうての事付山椒にむせたる事

今はむかし、浮世坊さらば是より天王寺にまうてむやと思ひ、さかひ町すぢをくだりに南をさしてゆく。新清水庚申堂をも打過て、石の鳥井につく、生玉のひかしのきし、極樂の東門にあたりける、佛法最初の靈地聖徳太子の建立なり。いにしへは石の鳥井のもとまで海にてありけるとかや。今は一里あまりはるかに西かたに海つらは見ゆ。二月廿二日は太子の薨し玉ふ日なりければ、たふとふ會とて毎年に天王寺の樂人伶人の舞をいたすとなり。そかみめくれど、本堂、金堂、守屋堂いらかをみがき、玉をちりばめ、きれいなることいふばかりなし。龜井の水をみれど、とこしなへに流れて、いかなる日でりにもかはくことなし、まことに末法萬年の後までも、此寺の佛法、はた、いてんすまじきしるしなり。うき世坊かくぞよみける。

くみてしる龜井の水はよろつ世まで
　たえせぬ法のためしなりとは

と口すさひ立やすらふ所に、折ふし本堂のうはぶきなりとて普請奉行とればしきが、六十あまりなる男●びんひげしろく、さかやきは、蠅の滑るはかり、き（頭

んかなる(の禿たること)ぎら〳〵として、たちつけをして、杖をつき、しばらくやすみゐる。かゝる所へ、ざいがう者と見ゐて、わかきもの五六人まうでゝ、是も同じ所に尻うちかけてゐたりしが、その中にある者、こしに付たる百なりべうたんより、あさくらの山椒をとり出し、くちにいるゝと見ゐしか、そのまゝむせ出つゝ、兩のまなこをしろうくろうなして、かのふしんぶぎやうにはしりかゝり、さかやきにくらひつきたり。此男きもをつふし、是はいか成ることぞ、らうせきものとてくみあひうちたふす、道づれの者立かゝり、やう〳〵引わけたれど、むせもなほりぬ。男大にいかりて、れのれは何ゆゑに某(自身のこと)かさやきをむくらひけるぞといふ。むせたる男申やう、ひごろ在所にて古き人のかたられしは、わかき者共は聞てれくべし、いつにても山椒にむせたる時は、銅のやくわんをねぶればなほるものなりと、をしへれきたるを、只今むせて目のくらみたるまぎれに、貴殿のさかやきのきんかにしてぎら〳〵とひかるを、やくわんかと存じてかぶりつき侍る、ゆるさせ給へといふ。をとこ聞ていよ〳〵はらをたて、某のさかやきをやくわんに似たりとや、口惜きしだい也、いでれのれがかうべをうちわらんとてとんでかゝる。浮世坊立よりてあつかひけるやう、まことに御腹だてらるゝ所は道理にて候、さりながら、此噎たる者が、そなたのきんかあたまを、いもくひにもしたるにあらず、ねねうぐひにも、あはれぐひにもいたしたらばにくきことにて侍れ共、山椒のむせをなほさんために、藥ぐひにいたしたることなれば、かんにんし玉へといふ。男ちからなく、御坊の御あつかひを尤と存すれどゆるし侍べるといふ。むせたる男手を合せてよ

ろこび、浮世坊に是は當坐の御禮なり、ざいしよは南條田と申所の者也、かならずれはしませ、ちさういたさんとて、錢百文とらせていにけり。

●住吉まうての事付堺のうら潮干の事

今はむかし、浮世坊よき知人をまうけたり、しのだにゆきて邏齋（托鉢の事）侍らんと思ひつゝ、それより住吉のかたにいたりぬ。津守の國量が歌に

橘の小戸の汐瀬にあらはれて
むかしふりにし神ぞこの神

とゐいしけん、住吉の明神、ちかきころに造宮有りて、きらひやかに、あけの玉垣もひかりさしそひ、そり橋のぎばうしも金物きらめき、社の柱も丹塗の色わかくてりかゝやきて花やかにぞれはゆる。六月晦日は當社の御祓也。かけまくも此御神は、いざなきの尊日向の國たちばなの小戸檍が原にて御禊し玉ひしに、海上の波間より底筒、中筒、表筒とて、三社の神あらはれ玉ふ、後に神功皇后三韓をせめ玉ひし時に、此明神あらみさきとなりて異國をしたがへ玉ふ。されば、じんこうくわうごうの御やしろを合て、すみよし四所の明神と申こととさら歌道をまもらせ玉ふ御神なれば、俊成卿此やしろにまうで、

和歌のうらの道をばすてぬ神なれば
あはれをうけよ住吉の神

とよみ玉ひけんもたふとし。浦半に出て見れば、なみたてる松のこずゑ、打よする波に花咲かと思はれ、きしに向へる淡路島程ちかくみへ渡る、眺望すぐれたる所也、是になくさみて浮世坊かくぞ思ひつゞくる、

世の中のものうきことをわすれ草
生ふといふなるすみよしの濱

かやうにつぶやきて行ほどに、いつみの堺にさしかゝり、鐵砲町を打すぐる。名に聞えたる舳の町九艘の小路は、昔は神功皇后の三かんをせめしたかへて歸陣ありし御座ふねの舳のつきたるあとなれど、舳の町といふ。爰は甜瓜の名所也。軍兵の舟九艘まで着きける所を九そうの小路と名付たり。すゑの世なれど、となへあやまりて、何とやらんくさそうな所に名をよぶも又をかし。堺のうらはむかしくろふねの着きたるみなと也。又物の上手も有りけるにや、數寄者の紹鷗、こうたの立達みな此所の人なり。何よりおもしろきは三月三日の潮干のあそびなり、常にはたゝへたるうしほの、此日は干あがりて、尼が崎までは歩わたり一もんじなり。京大坂の好事の者、しほひのあそびにあつまり、小うた、三味線、ふゑ、つゝみ、又、蛤をふむおもしろさ、諸國にはならびなし。

かたみの蕨（續）

志貴婦遺稿

巧笑倩兮

たをやめの裝ふもおなじ畫くにも
　白きよりしてのちにせよとや

起予者商也

おのづから心のはなの咲き出でゝ
　君がたもとにはひそめけむ

夏禮吾能言之

ゑをりなき道にはいらじうま人は
　其の國々のならましを見て

或問禘之說

ことの葉になくてしらするなな心

さしてはいはす其いつくしみ

祭如在祭神如神在

君親の御かげをたかくまつり上て
ますが如くにつとめいやまへ

王孫賈問曰

わか思ふ其かたく〳〵にへつらひて
まか罪うくる身とはしらすや

獲罪於天無所禱也

理のなきいやことはなかく〳〵に
うくる罪さへけつかたぞなき

周監二代郁々乎文哉

眞心のはなにひらきてうるはしく
さかゆくしかた我はしたはむ

子入大廟毎事問

毎事にとふはいやまふいたりなり

御れやまつりの室にいりては

射不主皮

ゆみいるは其の人々のちからにて
的のゝりにはよらぬなり鳬

賜也爾愛其羊

壽してたゆすまつらんよしゑやし
むかしの跡はなき世なりとも

事君盡禮人以爲諂也

へつらふと人はいふとも君がため
いのちをかけて盡せ眞こゝろ

定公問君使臣臣事君如之何

いつくしむ心しあらむたみもまた
法をいかてかまもらさるべき

關雎樂而不淫

昔のつゝりのふみのみやびさや

よきになつますらをにやぶれす

哀公問社於宰我

千早振かみのいかきはかしこくも
みさをある木を植ゑて祭らむ

子聞之曰成事不説

なし事過にしことはもろともに
天にまかせていさめすもかな

管中之器小哉

すみ縄の法にはつれしはしらもて
いかで棟木をうけんとすらむ

語魯大師樂曰

吹ものはあはせはなちて睦ましく
かよふしらへを道となすらん

儀封人請見曰

法なきを天もあはれとをしへの師
くたして道のしるべすらしも

子謂韶盡美矣又盡善也

れもてふせ其のもの丶音に眞心の
ふかさ淺さをき丶しらるべし

居上不寛爲禮不敬

高しとて豐かにもなしいやもなし
なさけゑらすは何とかはせむ

里仁爲美

情しるところゑらひて住みぬべし
さてそこ丶ろの玉もみかけむ

不仁者不可久處約

眞心のひとはやすらにれとしこみ
さかしら人や世にはときめく

惟仁者能好人能惡人

うま人はひとを憐れみよしあしの

いましめもまた法にたかはす

苟志於仁知無惡也

まこゝろの情をたるゝこけしみつ
塵のにごりもましらさりけり

富與貴是人之所欲

其の道をまこゝろにして求めなむ
とみもたときもそはるなけ鳬

貧與賤是人之所惡

是もまたきらひても猶したひくる
ときと折見て遠さくるなり

君子去仁惡乎成名

うま人のつとむる道はわさゆふの
物くふ間たにたかはさりけり

高崎正風大人講話筆記（續）

○西行法師の歌

ことわりをむねとしてよむことゝなれるは、早七百年ばかり以前よりの弊なり。行誡上人かつて問はる、先生はいつも、山、柿、紀、凡、のみを賞せらるれども、一世の人傑たる西行法師のことに及ばれざるはいかなる故にか、貧道は實にかの法師をもて古今一人と思ふはいかにと問はる。已いふ、さなり、西行は人物におきては實に敬服すべし、されど、その歌に至りては、いまだことごとく服することあたはず、およそ其の歌に、西行の性情を僞らずよみいでたるあり、此は感ずべし。又聊理にわたりて、彼の人物に不相應なるあり、此は感服しがたし。かの、

みちのへに清水流るゝ柳かげ
　しばしとてこそたちとまりつれ
ふりつみし高嶺のみ雪とけにけり
　清たき川のみづのしらなみ

などは、いと高潔なる調にて、實に西行の眞面目なり。されど、巳の服せずといふは、かの小倉百首にある有名なる歌なり。

なげゝとて月やはものを思はする
　かこちがほなるわが涙かな

これ理に過ぎたり、何となれど「なげゝとて」といひてはいひつくして餘韻ともし、貫之、躬恒などによませましかば、さだめてかくはよまざるべし、巳は初句「秋の夜の」とあらむかた適當なるべしと思ふなり。すべてことわりしたゝかになれば、餘韻短くなるなり。かの服部南郭の說に

采菊東籬下　悠然見南山

とある句なぞ、よきことはよけれども、同じくは悠然の二字をかへまはし、菊を東籬の下にとりつゝ南山を望む、其の樣悠然たることは知られたり。悠然の二字ありてかへりて興味の薄きを覺ゆといへりしはさることにて、餘韻の大切なる事思ふべし。今此の法師も「なげゝとて」の一句にて餘韻を減殺したるなりといひしかば、上人はじめて領解せられき。

○理と情と

なは、いはゞ、理は餘韻を減殺し、情はこれを增加するものなり。たとへば古人の

をみなへしいろいろにころ露もれけ
　花には黄玉葉には青玉

といふ歌の如く、ことわりのみにわたりては歌の價なくなるものなり。之に反して、素性法師の

ぬれてほす山路の菊の露の間に
いつか千年をわれは經にけん

此の歌理をみていふ時は有るまじき事なれども、只此歌を誦すれば命も延び行くやうに覺ゆるは、情に叶へばなり。これにて理と情との差別よくよく味ふべきなり。

宇田翁いふ、高崎大人の此の一場の談話は、斯道の方針に就きて説かれたる也。其の方針は即情を先にし理を後にし、巧者を求めず矯飾を用ゐず、眞實の性情を述ぶるに在り。彼の題詠の如きは、素より歌の眞面目にあらず、總て已が遭遇せざる場合において、其の景又は情を想像して述ぶるもの故、やゝもすれば巧に過ぎて虚僞に近き事のみいで來るもの也。兵の演習は實地の敵に對して戰はむ時のため也。題詠も亦斯の如し。各自其の遭遇する時と處とによりて、眞景實情をよみ出でむための稽古なり。されば、これもつとめて眞景實情に背かざるやう心掛くべし。一向に作り物となりては詮なき也。此の事談話中には無けれども、予大人の意を推して之をいふ也。（をはり）

筆記者　山本　行範

笑話　みゝか、

いさゝかの事にも事々しう打ち腹立ちて、關係なき他しものにまでも怒をうつし、八當りにあたりちらして、そこらにあり合ふ物を投付け打毀しなどするは、これ度量狹くして、然かも我儘なる性質の人ぞかし。或る地にかゝる癖の人ありけり、或日外方より不興なる体にて歸家り來りけるが、やがて晝食せ

むとて膳に向ひ、箸とりあげて見れど、常用の箸とは違ひてありけり、飯を食ひけるに思ひしに違ひていと冷くなりゐたりければ、ムシヤクシヤ腹に汁一口に吸ひけるに、舌もやけなん斗り熱きに、例の癇癪玉むら〳〵と煮へ上り、エッと云ひて、椀も茶碗も膳もわたるに任せて外面に投げつけたり。傍に在りし此男の姉なる人は、此樣を見て、已もまた飯櫃菜臺などありあふものをてど〳〵に外面に投出しければ、弟はこの意外のふるまひに氣を奪はれ、只忙然としてありけるが、やがて姉に向ひ、こはいかなれどかも、かく無謀のふるまひや仕玉ふらんとなじる。姉はいと落付たる調子にて、されどなり、御身は外面にて食事せむとてかくも器物を投出すらむと思ひ居りて、妾はかくも手傳までなしたるのみと云ひけれど、弟は返す言葉も無くてそこを立去りけり。此の姉のいと興ある戒めによりて、この後は弟のはしたなき癖もふつと止りけるとなん。

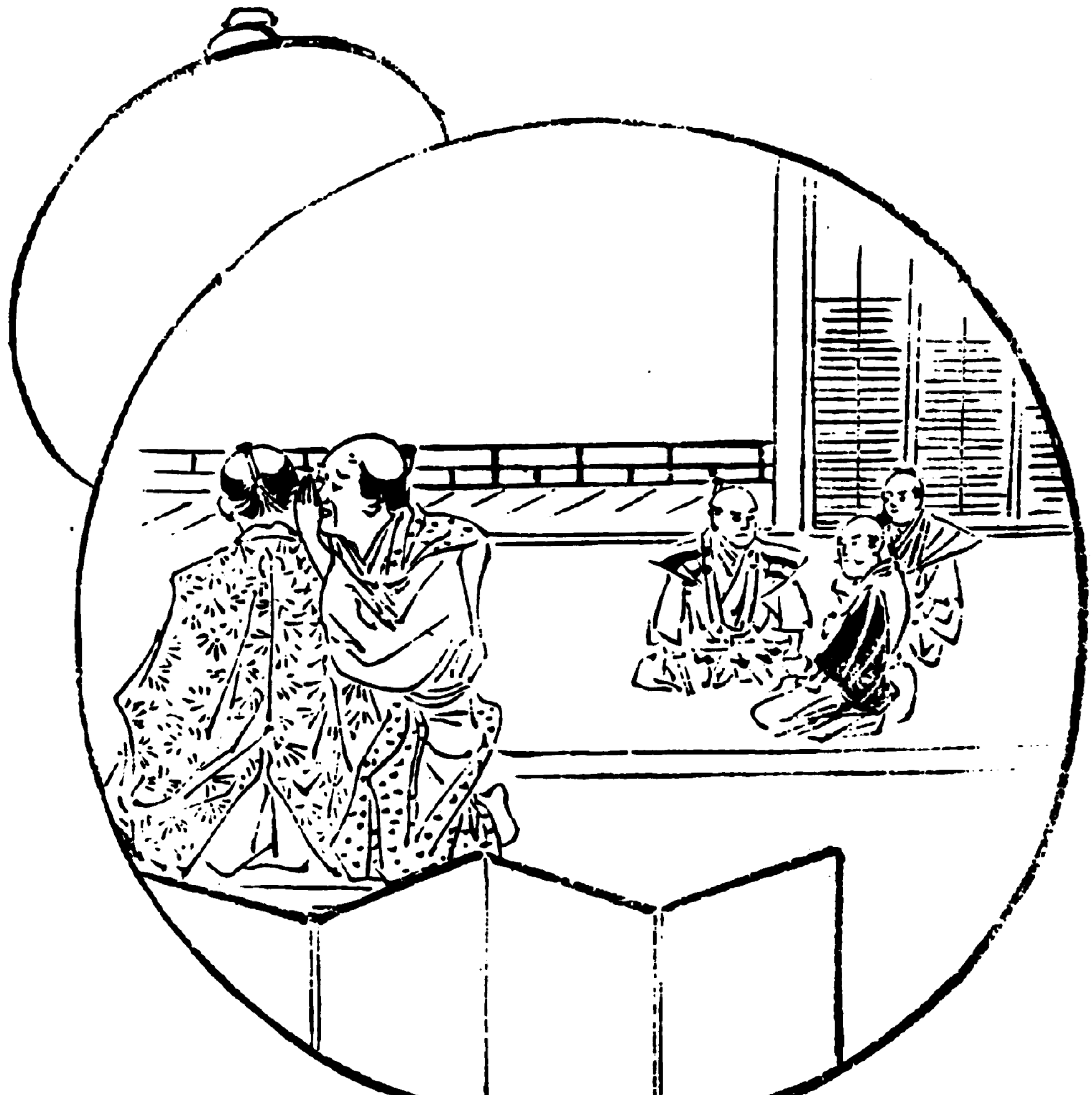
才くらべ（四）

蓬生屋女史

曾呂利新左衛門が頓智

滑稽を以て豐太閤にいたくよろこばれし曾呂利新左衛門は、もと、刀の鞘師にして、泉州堺南の庄目口町の内に、淨土宗の寺内を借りて住ひけるが、才ある人なれど、細工にもいみじき妙を得て、小口より刀をさし入るゝに、つど口そろりとよくあふ故に、曾呂利とは名のりけるとかや。

此の曾呂利才いみじく、狂歌に巧にして、如何なる席に、如何なる難題を云ひかけらるゝも、つゆおく



る丶事なく、そろりとよみ出でては、人々を感笑せしむる事多かりき。かつて、秀吉公、千代の友といたく秘藏されし庭の松の、如何にかしけん、ふと枯れけるに、流石英雄の心慮にもそゞろにものさびしく、我が世のかげればつかなく思ぼしながめらるれど、御近習のものども丶、心細くうちしをれけるが、曾呂利こを聞きて、そは限りもなき目出度御事にこそ、やつがれ御壽申上け奉らんとて、

御秘藏のとこよの松はかれにけり
れのがよはひを君にゆづりて

とおもしろく書き流しけるに、秀吉公之を見て、いたくよろこばれ、愁のまゆとみに開けて、いと氣色よう、誰にもあれ、曾呂利に黄金をとらせよとありけれど、曾呂利承り僅に三十一文字にて、恩賞をうけ給はるは、誠に以て難有仕合せに候へど、しかし、只今其御金を拜領仕らん

よりは、日毎に君が御耳を嗅せて給はらん事、中中に、今日の御金にまさりて幾倍もありがたからんと聞ゆるに、をかしき願かな、そは、いと安き事なり、くるしからず、毎日如何ばかりともかげよとて、いと容易くゆるされけるに、曾呂利うちよろこび、それより毎日諸侯寺が伺候の時を窺ひては、まかり上りて大閤の耳をかぎけるに、大名たちみな我身のよしあしをさゝやきつぐるなるべしと思ひおそれて、皆うち〱に曾呂利にへつらひ、金銀をまひなひ送りけれど、曾呂利は、げに、ありし日の一金にはまさりて、千金をあつめ得、にはかに有福の身となりけりとなり。太閤が耳の穴たゞ二つを以て、流石に大なる大鳥をおとしたるをかしさ、後、人々之を聞くも、[illegible]らもにならず。罪なきは滑稽にこそ。またある時の御茶菓子に、黒胡麻のあんのつきたる餅の出でけるに、曾呂利此の餅を題にて狂歌、とくとくつかうまつれとあるに、

くろごまのかけて出たる餅なれど
食ふ人毎におらうまと云ふ

と速によみ出でたるに、秀吉をはじめ、一座の人々大に笑ひどよみたりとなり。

名月の夜、曾呂利おそく御前より下りたる歸りの袂を、近習たちひきとめて、今宵は名におふ名月、例の狂歌をのぞみなど、定めしかねて作りおきけん、さやうのは如何によくよめたりとて、かねてより孕みおきたる句なれど、おもしろからず、されどその孕み句と云ふを題にて、只今すぐに名月の發句せよと難題を云ひかけける聲の下に

はらみくやさんご夜中の子望月

とよみたりしに、困らせんと巧みし近習ども、今更

に感ずるのみなりきとぞ。此人、滑稽を弄する中に、またよく主を諫めし事多かりき、そはまた次回にゆづるべし。

須磨の月（一）

白魚女史

名こそ常盤なれ、落葉して鹿の音悲しき讃州松山の、晝さへこむる白雲に、卒都婆も埋れて、おどろ深き靈寺、なく虫の聲もそゞろに身にしみてあはれなる墳墓の前に、みどりなす少女姉妹、やう〳〵肩すぎしばかりの黒髪、千すぢ、八千すぢに亂れこぼるゝ涙を、紅の袂にせきとめ〳〵、玉の如き柔手を合せて、もろともにしばらくは、回向の聲にむせびけるが、いつしかもむ手も合はず、固めし膝もかきくづれて、涙しどゝに塚にとりすがり、母樣〳〵、妾は母樣の御傍に行きたや、母樣、物仰せてよ、何とては物云うて玉はらぬ。幼かりしとて、忘れは侍らじ、御いまはの折、たとへ身は草葉の露と消ゆるとも、魂魄は必ずそちたちの身にまとひて、生ひ先きを見てあらんに、必ず口惜しき色になうつりろとて、力なき御手に、かき撫で玉ひし御事も、御言の葉も忘れは侍らじ。母樣、母樣も忘れ玉はでか、面影ばかりは絶えず目にも見え給へれど、御言葉をもかけ玉ひてよ、母樣とすがり、姉妹が泣く涙、おくつきの草に落ちて聲あるばかりなり。

姉妹はます〳〵むせびて、はては聲さへ出です、まろびかへりて、生きたる心地もせざる折りから、誰が吹きならすらん、峯の松風と共に、笛竹の音のかすかに聞えけるに、姉はふとおどろき、彼の亂れた

るふしは、妹よ、また、例の、あらずやと顔うち守れぞ、それよ、まさしくそれに侍り、岩作のぬしのしらべよとて、妹もあさましく、互みに顔をうち守り、如何はせんぞ、せんすべしらに見ゐけるが、やがてまた涙にむせびて、母樣、母樣、此のまゝ、此處に引きとり給ひてよ。妾たちも此の塚の下に、もろともに入れ給へ。母樣、もはや家に歸るはうし、つらし、母樣、二人を仇なる色にそめさせじとならぞ、此まゝに此處に、すぐに引き入れ給びてよ。母樣とぞかり、現見ならぬ母を呼びたつれぞ、石には聲なし。ふきすさぶ笛竹の聲はいよ／＼高く、峯にも尾にもひゞき亘りて、やう／＼近くなりぬるに、かくてはあらじとて、姉妹は名殘をしげに立ち上がり、涙をぬぐひて、此處にありと知られなぞ、またや母樣につげられん、妹よ早うとて、いそぎて、かたみに手をとり、紅葉の木がくれに入りぬ。なほ笛竹のふしおもしろくふき立てゝ、上り來りし男、からからとうち笑ひ、さてはかくれ給ひしよな、如何なればかくれ給ふ、尋ねも上りたる心は、あだにはあらぬものを、よし、よし、何處にもかくれられよ、岩作、岩をさきても尋ね侍らんに、これぞかりの山路、何の事かはあらんとて、茂れる熊笹をふみ分けけるが、やがては影の見ゐけん。やは、れはしたり、如何に紅葉の色にまがはせんとし給ふとも、君が方こそ今少しくれなゐまさりては見ゆれと云ひつゝあゆみよるに、姉妹は、今更にとむねをうちしが、ろのまゝまた深くはかくれんともせず、はなみ亂るゝ薄をとるさまして、襟かき合はするほどに、岩作近づきよりて、如何に、姫たち、岩作は漢の呂后、君が居る處は山にても、海にても、殊なる雲のなびくや



う見ゐて、つゆまどふ事もあらじ。何をさやうに恐れ給ひて、いつも岩作とならび給はぬ。顔こそむくつけくもあれ、名こそ固くもあれ、心はやさしき男、君が山路の雫にぬれ給ふをあやぶみて、後見にさへ參ゐりしほどのやさしき心、少しは汲みても給はれなどゝ、二人が傍近うよるを、姉は答へもせず、なほ、彼のすゝき、あのかるかやと、それとなく傍をはづすを、岩作はなほつきまとひ、さるにても姫だち、何とては姫もつれず、婢女をも供はず、二人のみしてかゝる處へはふみ入り給ひし。なき母御の如何ばかり戀しければとて、石にとりつきて泣きたればとて、何かは歸り給ふべき、さるよりは母御前の仰せかしてみ給ふが道ならんなど、少しく後目にかくるを、二人は作れむばかりの心を靜めて、いなとよ、なき母樣の御墓をとひしにはあらず、先きより此處に、のう妹。もはやよきものゝあつまりたれば、歸りなんとて、露重き袂をうちしぼり、七草ぞめにはなりけるよとて、くるしき笑みをつくるに、岩作わざとなき顔をのぞみこみて、いつはりをたゞすのもりの神ならずとてもとて、空うそぶきぬるに、重ねてとかん言葉も出でず、泣かじとすれど、涙しとゞに草葉を染めぬ。あはれ、讃州鹽飽が大領時國が娘と生れて、めでいつくしまれしも、慈母なくなりては、人にあなどられ、名にし負ひたる松風、村雨の、世にもさびしき身の上なり。





文林

夕水鷄　　近衛忠熙

百とりはねくらにかへる夕まくれ
もりのしたみち水鷄なくなり

夏雲　　東久世通禧

浮雲はまたあめならしきのふけふ
にはの木のめも摘はてぬまに

市中梅雨　　久我建通

賣んとていちにたはねしあやめ草
そのまゝくちんさみたれの頃

夏山　　高崎正風

海つらもかはへもあれとあし引の
やまころなつは涼しかりけれ

遠郭公　　津輕承昭

ふしのねにのこる夕日の影おちて
裾野はるかになくほとゝきす

樹陰螢　　前田利鬯

しけりあふ森の木かけは月の夜も
光さやかにとふほたるかな

船納涼　　押小路公亮

このまゝに月もすみたる川ふねに
秋のくるまてすゝみてしかな

山家夢　　宮地厳夫

やまさとにいりて久しく成ぬれと
都をゆめに見ぬ夜半そなき

樹陰夏月　　北郷久政

しけりあふ若葉をもりて端居する

袂にやどるなつの夜のつき

夏露　植松有經

夏くさのすゑたにこほるゝ露みれは
てりと照日も透らさるらん

避暑　諏訪忠元

早瀬川なかるゝみつのれときけは
夏もかよはぬところなりけり

夏舟　仝

すみた川風さへのせてゆくふねは
よろのみるめも涼しかりけり

夕顔懸籬　遠山英一

くれたれと火影もみへぬ賤かやの
のきはに白きゆふかほのはな

夏夜　本居豊穎

若葉うつ瀧の音きよしはたるとふ
しまやまめくる月もまたはや

夏色　師岡正胤

かはの水やまの樹々の葉田のさ苗
夏はみどりぞひとりしめたる

梅雨をやみだになく空
うたて寒かりけれど　林甕臣

いかでかり照る日を雲やへだてけむ
夏はな寒しさみだれの空

鈴木阿辰　佐々豊水

父と夫に死てつかへしまごゝろを
神もあはれとうけたまひけん

夏哀傷　大畑弘國

はと〻ぎす共にきゝしは夢なれや
かたみにのこるなつの夜の月

螢火似玉　三輪義方

とぶ螢おひまどはしておもふかな
玉はねがたきものにぞありける

雨後夏月　　足立正枝

ゆふだちにあつさながれて早川の
瀬の音すゞしき夏の夜のつき

海邊蟬　　菊地眞澄

なく蟬の聲も一つにひゞきあひて
濱松かぜのおとぞすゞしき

瀧下避暑　　草野隆道

たつねきて今こそ夏をわすれけれ
おとにきゝつるおとなしの瀧

夏草　　酒井喜雄

くちてのちはたるとならん夏草の
露のひかりをまつめつるかな

はしたなきもの　　龜谷行

なからひて浮世をたどるすべもなき
人のゆくへぞあはれなりけり

くるしけなるもの　　安齋篤敬

よのなかは牛のくるまの重荷つみ
こゝしき坂をこゆるとぞしれ

月下納涼　　木庭芳香

すゝしさのいつくはあれど久堅の
月のかけにはおよばざりけり

朝梅雨　　近衞貞子

桐のはのしげりこめたる窓のうちは
あけてもくらしさみだれの空

蟬　　鍋島榮子

梅雨のはるれはやかてあつき日に
こゑあらそひてせみぞ鳴なる

草中螢　　柳原愛子

夏ふかき淺茅かくれにゆくみつの
　なかれも見えてほたる飛なり

雨後遠望　小池道子

雲はまたたゝよひなからあし引の
　やま見えそめて雨はれにけり

行路蟬　北島以登子

ゆけと〳〵立よるかけもなき道に
　蟬のこゑのみしけくきこゆる

瀧下螢　松平健子

落たきつ岩にくたけてちるたまに
　ましる光はほたるなりけり

螢近飛　伊達寿子

さよふけてふみよむ窓の軒ちかく
　照しかほにもゆくほたるかな

夏夕　中牟田常子

日さかりにたへぬ暑さに引かへて
　ゆふ風すゝしにはのあさちふ

夏鳥　原田蒼生子

をもたかの生ふる汀に白さきの
　色もすゝしく見えわたるかな

樹陰夏月　河村重子

影もらす若葉そよきてふくかせに
　すゝしく見ゆるなつの夜の月

母親の乳兒を海中になけ入れしよしを
新聞紙にてきゝ侍りて　遠山いね子

つひに身をしつめむ淵と知すして
　底のもくつと子をやなしけむ

さるに浪の打よせて幾度か兒を磯邊へ
　もちかへりしときゝて

あた浪もなさけは知ていくそたひ

兒を磯邊にはうちよせぬらん

夫天者人之始也父母者人之本也人窮則反本故勞苦倦極未嘗不呼天也疾痛慘怛未嘗不呼父母也。といふ語のあることを思ふにも其兒のいとあはれにて

今ははた何をよはゝんいのちとも
　たのみの親にすてられしみの

和氣公　　　稅所敦子

くにのためみがく心のかゞみには
　神のみかげもうつりましけん

夏夕　　　海上壽子

いさ子供はたるがりせむ水きよき
　夏のゆふべの川つたひして

夏籠　　　安東菊子

玉くしげ箱根の出湯にゆあみして
　ふたつきむかり夏こもりせん

學生にれくる歌　海上壽子

ちゝの實の　父の命　はゝそむの　母の命　二親の　恵れもはゞ　れくふかき　文の林に　朝さらす　いりたちまして　そこひなき　硯の海に　夕さらす　れりたちまして　いきのをに　はげみいそしみ　まなびしら　學びの道を　ふみなたかへぞ

あふさきるさ　(二)

五十圓の德文

六日、けふも雨なり。空は何時晴るべしとも見えず。路あしくて車はかよはずと聞けど、人をやとひて、持たるものどもをになはせて、徒歩よりゆかんとす。

宿のあるじはしれる人にて、このさまを見てはかりけらく、今朝たち給ふとも慣れたまはぬみちなれど、なかなかなり。けふ午の時をまちたまへ、空は晴れずとも雨はやむべし。さて馬車の通ふがあなれど、これをめしたまへ、といふに、心いちはやれども、げにとればゆるまゝにうけつ。加藤重和ぬしは年ごろの友なれどゆきとぶらふ。すみし家にはこと人住み居て、ぬしはさいつころふるさとにかへり給ひつといふもあやにくなり。やどの一間にこもり居たる徒然やるかたもなし。妻はつれたれども、かゝるをりにはおなじはびしさなり。いまは草こそまかね、旅なれどすゞろにものうくて、流のうき草のしどし根かゝる心地して、軒の玉水のしたゝるゝをのみぞうちまもらるゝ。壁には養老の孝子のかたをかけたり。親の翁こなたに鬚かいなでゝ居たるに、はるかに瀧の見えたる山のあなたより、孝子ひさごをさゝげて走り來るさまなり。見るから心うごきてあはれと覺ゆ。

親をおもふそのまごゝろを山つみの
　神もあはれとみそなはしけむ

瀧の水酒となりてもおちにきの
　かぐはしき名は世にながれつゝ

そもそも人は心をもてもとゝす。心だにまことならば、事にふれては、目に見えぬ鬼神もあはれと思ひて涙もおとしぬべし。氷のうへに魚をゑり、雪のなかにたかむな生ひけんは、もろこしのみにはかぎるべからず。近くは鳶魚をもちてかけり來て、軒におとしきといへるものがたりもわがふるさとにのこれり。かゝるためしは、むかし今にともしからず。これみなたゞごとにはあらじ。天地の神あはれとみそ

なはし給ひてのみわざなるべし。世の常にかはりてくすしくあやしくて、俗耳にはいりがたけれど、うけがてにしてあるまじき事におもふはおろかなり。又こなたの篇額には筆のあとをかしく、義勝慾則昌といへる五つのからもじをがきてかゝげたり。今の世には思ひあはせらるゝふしなきにしもあらずなどおもふほどに、晝食めせといふ聲におどろけど、はや午の時なりけり。とかうするほどに、馬車を家の門にたてゝ、いざとうながさるゝに乗りていでたつ。實にまことにあめはやみたり。野中の細道のあやふげなるを驅りてゆくに、ところにはつけたるものにて、馬子よく馬をつかふ。長南の宿よりは道いろし。山と山とのあはひをのみそひゆくに、ゆけども〳〵見ゆるものは、たゞ青山ばかりにておなじところをゆく心地す。小土呂を下るほどに見やれど、わが里もほの見えてうれし。横山の里もこえて、午后の五時ばかりに大多喜にはつきぬ。車を下りて宿に入れば、妻の妹むかへてよろこぶ。隣の人々も來あひたり。母の君にもありつるやうなどものがたりて、うれしげなるおもゝちには見ゆれども、おもかげいたくやせて昔のすかたにあらず。なほ近き隣の家々をおとづれて、歸り來たるよしをきこえて、醫師なる青柳直道翁をも訪ひて、こしかたのありしやうをとひたづね、なほゆくさきをもたのみきこゆ。鋤柄ぬしにもあひて、なにくれと物がたるほどに夜はふけぬ。養母の君はやく夫に後れて、年三十七といふよりやもめにてことし四十路に二つを加へたり。もとよりみさをたゞしくして、妻と妻の妹との二人のうみの子を一人の手にもりたてつゝ世を經わたりたまひしなどすぐれてめでたく、婦たらん道をふみた

まへりといふべし。さるをいかなれど今かゝる病になやみたまふらん。たゞかたときもとく病のおこたらんをわがふ外はなくてなん。

（完）



●天覧　去し廿一日、京都美術協會より天覧にとて奉りしは、北垣國道男のもたる八島物語繪巻物なり。　陛下みそなはし給ひて、いたくめでさせ給へりといふ。さてこの繪巻はもとも美はしきものにて、もと東京の舊家某がもてりしを、某貴顯これを買はんといひしに、價いとひくゝからずしてやみしを、北垣男きゝて、かゝるものをもし外國人の手にもれちなせ、いとくやしく取りかへしもなるまじかるべしとて、かひとりて人にも見せずてありしを、こたびかく天覧に供し奉れるなりとなん。

●氣入彦尊の御墓　景行天皇の皇子にして日本武尊の御弟宮なる氣入彦尊の御墓はこれまで所在不分明なりし處、今度發見したる愛知縣碧海郡本郷村大字西本郷蓮華寺傍の古墳は、正しく此尊の御墓ならんとの事にて、目下其筋に於て取調中なりといふ。

●外人の神教信奉　外人と雖我が國躰の尊嚴なるをきゝては如何でか之を欽仰せさらんものあらんや、宜なり、頃日出雲大社の千家尊愛氏九州地方を巡廻して長崎にいたるや當地居留の米國人十九名、獨逸人十五名は大に氏の說教に感じ、且つは氏が神代以來系統連綿たる舊家なるを聞き欽慕に堪へず遂に出雲派神教の教徒に加入せりといふ。又米國人三名獨

逸人一名が其家族を提げて之に加入したるその誓文といふものは左の如し。
因にいふ濠洲人ナーヒッチンといへる者も先年より同教に加入し居れりと。

大日本出雲社に鎮座し賜ふ神界主宰の大神に御依頼申上生死不二大社の御教に歸順し今般貴教會に加入仕候就ては御規則の趣厚く相守可申候也

私誓

米國ニウヨルク府人　イーダブレーツシミツ　イーダブレーツユツシン　外に家族四名

同國同府人　マスカタト　外家族五名

同國メンシツレツ人　ジンミハタ　外家族六名

獨逸國首府人　ハリーハンゲン　外家族四名

外人すら斯の如し、况や我が國人にして我が國體の重うすべきことあるもかへりみず、徒らに、異教を奉し、アーメンを稱へて文明顔する輩は少しく猛省する處あれ。

●女子高等師範學校の生徒募集　此度女子高等師範學校に於て、高等師範學科第一學年に缺員あり、試驗の上拾貳名入學せしむるに付、志願者は願書に履歴書及住所族籍、氏名、生年月日に關する市町村（東京市に在りては區長）長の證明書を添へ、尚尋常師範學校卒業生服務義務年限中の者、若くは現職ある者は本屬長官の許可書をも添付し、來八月十五日限同校に申出つべしとの事なり。尤も志願者は、尋常師範學校の二箇年半の課程を終へたるもの、若くは之と同等の學力を有する者にして、年齢十六年六ヶ月以上、二十一年六ヶ月未滿の者なることを要し、入學試驗科目は、躰格、國語（文法、解釋、作文）、漢文（解釋）、數學（算術）、歷史（本邦）、圖書（毛筆、鉛筆）、習字（楷行草、平假名）、裁縫、音樂（單音唱歌、聽音）の各科目に

して、來九月二日より同六日まで試驗施行の筈なり。而して試驗合格者は、四ヶ月以内假に入學せしめ、其資性品行才能など審察し、適當と認むる者に限り、本入學を許さる、假入學中は自費にして學用品費食料を合せて毎月凡金五圓を要すと云ふ。本入學許可せられたる後は勿論官費にして、學用品費食料として毎月金五圓を給せられ、尚此外に一年生より三年生までは被服料として壹ヶ年金拾二圓を給與せらるゝ由

●東京府高等女學校沿革の大略　本年六月調製したる東京府高等女學校一覽といふを同校より寄贈せり。今之に仍りて仝校沿革の大略を見るに、該校は明治二十一年十二月二十八日、東京府令を以て、京橋區南小田原町四丁目八番地に設置する旨を達し同日職員を定め、越えて又二十二年一月十五日全職員の任命あり、即校長は東京府屬大東重善氏たり、生徒の募集は、二十一年十二月下旬廣告し、翌年三月に至りて百二十二人の入學志願者あり、玆に於て仝年四月一日を以て始めて業を開く、校舍は工手學校を假用して之に充てたり、而して仝年年末に至りて一學級を加ふると共に在籍生徒二百〇一名に達せり、此の年翌年度の經費を府會に提出する處ありしに府會は遂に之を廢棄し、學校は將に廢滅に歸せんとする危運に遇ひしが、かくては今在校せる多數の生徒をして方向に迷はしめざるべからず、甚だ之を遺憾として存立の議は篤志の有志者によりて行はれ、二十三年七月十二日、服部來淨、元田直同、大東重善の七氏、其の維持を負擔致し度旨を願出て、仝二十一日之を認可せられ、府廳に於て管理することゝなれり。該校の今日あるもの實に此の三氏の盡力に由る處なり。然ど當時その財源は求むるに處なく只生徒の授業料入學料及有志者の寄附に仰ぐのみにして頗る困難の中に生存せり、時に本願寺亦此の擧を贊して二十二年十月より毎月金五十圓宛を此の校に寄附し大に校費を扶けたり、後二十四年九月に至り寺院燒失等の事情によりて之を廢止せしが、此の校が經濟困難の時に當り滿二年支持の功を奏せしは此の寄附あづかりて大に力ありしといふ、二十三年の年末には在籍生徒二百十七名に達し、二十四年十二月第一回第二回卒業生に卒業證書授與の式を行ふ、第一回十五名、第二回三十八名なり、是同校が卒業證書授與式の嚆矢とす。二十五年大東校長他に轉じ、東京府屬第三課長武昌吉本校長を兼務す。仝年十二月十八日第三回第四回卒業證書授狀式を行ふ、第三回の分四十八名、第四回の分二十二名、此の年末に於ける生徒の總數は二百〇三名なり、二十六年十一月武昌校長職を解き、東京府參事官李家裕二校長に兼任せらる、此の年の卒業生は四月は三十六名九月に七名なり、されども證書授與式は明年に延期せり。二十七年四月一日、第五回第六回及び第七回卒業證書授與式を行ふ、本年末の生徒總數、百八十七名。二十八年三月多少校則を改正せり、仝年四月六日李家校長他に轉し、仝七日岩谷敎諭校長心得となり、仝二十六日東京府參

事官谷口留五郎校長に兼任し、岩谷の校長心得を解けり。四月七日第八回卒業生二十一人第九回卒業生四十二人に卒業證書を授與す、此年小松宮殿下より赤坂三年坂下の御用邸（二階建百九十九坪）を下賜あらせらる。本年末の生徒總數は百九十五名なり。本年度に及び校運漸く盛ひ、内には規則の改正細則及生徒心得の創定ありて百事改進し、生徒の操行も亦善良に赴く、外は校舍新築の計畫あり、遂に小松宮殿下の恩賜を忝ふするに至りしなり。廿九年一月下旬先年に小松宮殿下より下賜せられたる御用邸を基礎にして校舍を神田區錦町一丁目二十番地に新營をくはだて、工費四千七百四十余圓にて二月三日より工事にかゝれり、二月十日小田原町の校舍類火の災に遭ひしを以て神田今川小路專修學校を借りて假校舍となす、此年四月入學試驗を行ひ、始業式を擧行して大に生徒の數を增し、五月十六日に至り始めて三百名の定員に達せり、此年の校舍設備費不足に付き東京府敎育會より整理公債證書面額五百圓を借り入れ、明年三月迄に之を償却するを約す、又三浦府知事より金百圓を寄附せられ、六月該校卒業生の團体同窓會員青木いよ野口きく福井しづ等二百五十人名より校舍建設費として金四百三十四圓四拾錢を寄附せり、六月廿日に至りて工全く竣り、仝日府廳より引渡したるを以て、七月一日こゝに移轉開校し、仝三日より授業を始む、こゝに大束重善、元田直同。服部來淨の三氏は此の校の設立者なりしが、其後漸く關係疎遠となりしかばその設立者たることを辭退の旨府知事に願ひ出でし處七月六日を以て許可せられしを以て、爾來該校は全く府知事の管理に屬せり、是此校組織上の一大進步なり、爰に亦此の校が未曾有の光榮とする處は、七月十七日、校舍新營落成開校式擧行の儀　聖聽に達し、畏くも　皇后陛下より金二百圓御下賜あらせらるゝの御沙汰あり、此實に此校未曾有の光榮なり。七月十九日開校式を擧れ第十回卒業生四十名に卒業證書授與式を擧行せり、三十年三月八日谷口校長秋田縣書記官に榮轉し、同十日岩谷敎諭校長心得を命ぜらる、四月四日第十一回卒業生に證書授與式を擧行す、卒業生六十四名、四月九日入學式を行ふ、入學志望者百三十九名、同十日始業式を擧ぐ、此に至りて生徒總數三百六十一名の多數に達せり。

●育兒院の遊園扇　岐阜市加茂町の濃尾育兒院にては、今回新に建築する工場の費用の幾分を補はんために、院の孤兒をして土產の遊園扇を製造せしめ、廣く世の慈善家に向つて購求をあふぐべしといふ、價は一個三錢五厘より廿錢までなりと。

●女從軍記者　は、歐米にも珍しき事にて、バーリエットボイド孃を以て嚆矢とすと、孃は去る五月の頃既に紐育ジョーナルの從軍記者として希臘人の婢十一人を伴ひ、希臘軍に投じたるが、各所の戰地に於て男子に劣らず能く疲勞と欠乏に堪たりとぞ。

●孩兒博覽會　歐州の諸國にては、時々孩兒博覽會といふを催して、小兒の發育の完全、性質の善良なるものには賞を與ふることとなるが、此の程、濠州メルボーンといふ處に於いて此の會を開き、小兒を可憐なるものと、溫和なるものと、美裝せるものとの三種に別ちて投票を試みたりといふ。其の特別なるものとして出場せしめたるアブソロ ロといふ女兒は當年七歲なるにその躰量は十五貫三百六十目ありしといふ。

●子犬親を養ふ　大坂八軒町の或寺に犬二匹ありけり。人々愛して常に種々の食物を與へけるに、二匹とも多くは食はずして、余りを噉へて何れへか持行ける。或日和尙跡を付て行て見るに、裏の墓所の隅に穴を堀有けるに、其中へ噉へし食物を落し入れ穴の傍にて哀れなる聲を出して鳴ゆゑ和尙不思儀に思ひ、是まで食物を噉へて來ながら、穴へ落して取ることとならぬゆゑ鳴ならん、愚なる奴かなと立寄りて穴の中を見れど、親犬とおぼしき一疋の犬何日の比より陷入りしにや、足のかゝりなき故上ることと能はず、穴の中にうづくまりて居たり。故に小犬二匹にて食を運び、親犬を養ふものと見ゑたり、二匹の小犬は瘠せ衰へても、親犬は穴の中に居て今日まで無事に命を繼ぐ有樣親子の情愛を知る事人間に勝れり。獸類と雖も如是の振舞實に感ずるに余りあり。是を思へど人間の淺ましきこといと耻かしきことならずや。（敎林）

●七尺五寸の大女　近頃緬甸に於て見せ物になり居たる大女は、年齡二十四、而も身の丈七呎半、手足の大さ格別にて香具師は之をラングーンより連れ來りたるものゝよし、梯子を用ひずして能く街燈を點

し、一日に米一貫目、鳥二羽を食す、此女二度夫を持ちたれども、今は寡なりといふ。

●最小の人類　此は前のにかはりて最も少さきもの、英國グラスゴーに於て生れ、リヴアープールに見せ物となる、其の名をカザーリン　エッリオットと云ふ。生後未だ數週を經ざるものなりとは云へ、重量僅に二十オンス、（百五十匁余）高亦た僅に十二吋（一尺余）に過ぎざりしとぞ、實に人類の最小なるものなるべしとて兩親は一週間三磅十志の手當を受けて之を見せ物に出し居りしが、遽に死去したるより其筋の疑ふ所となり、撿屍まで行ひたる由なり、左れども兩親の之を殺したりと認むる跡なく、温度滋養分等總ねて欠乏する所なく、全く病死したるに外ならずと鑑定されたり、但し其病死前は一日たりとも病めるが如き態なかりしとの事なり。

●加納諸平翁四十年祭　翁は近き世にすぐれたる國學者にて、號を柿園といひ、もと紀伊侯の國學館總裁たりき。をしへ子には伴林光平等數多きてゐたる人あり。翁和歌に巧みにして平田篤胤翁の道をつぎ更に一機軸をれてせり。又類玉集をあらはして名高し、ことし四十年に當れるとて、紀州和歌山にて人々相はかりて去し廿五日祭式を行へりしといふ。

●自治寮　東京なる第一高等學校には、去し廿三年二月木下氏校長たりしころ、東西南北の四寮の寄宿舍をれきて、學生の風儀を矯正維持せんとせしに、大に効果を得しを、文部省にてはこのごろこの南北二寮をさきて教員養成所とせんとす、惜むべしとて反對するもあり。

●女學生の日射病　德島縣尋常師範學校附屬練習學校女子部にては、去廿三日夏期休業に就き閉校式

を擧行せんとて、女生徒百三十餘名を一室に集めながら、容易に式を擧げず、凡一時餘椅子をも與へずして、起立せしめしに左なきだに苦熱耐へ難き折柄室の周圍なる硝子窓を閉鎖し、微風だも通せず、僅かに敎員の出入すべき約一間の戸口を明放ちたるのみなりしかば、草嶋某外三名の女生徒は忽ち日射病に罹りて卒倒せしといふ。時につけて管理者たるもの心すべし。

●工女を虐待す　とは、にがく／＼しきふるまひなり信州諏訪郡穂坂村なる山叉製糸場にては、さいつころ甲府より工女四十名ばかりを募集してやとひ歸りしが、工場に入れてよりは、つねならぬあつかひをして、食事をさへ普通にせず。いとむごきにたへかねて、その内の一人二人辛してにげかへりしかば、これをきゝて、さきに女を出しやりし親兄弟ども、安からずとて、暇どりにゆくもありときく。にがく／＼しきことなり。

●時の花　東京麻布仙臺坂なる仙華園は朝顔にていつもよりはよくさきいでゝ、峰の雪、都錦、東櫻、あけぼのなどことによろしく、去し廿五日より開園せり。蓮花は不忍池かをりふかきが例なるに、ことしは辨天祠畔にすこし生ひたるが開きいでたれど外はいかなれどにか生ひたちあしくてあかぬ心地す、秋草には向島花やしきなり。去年川の水あふれて園をひたしゝが、をみなへしはさへられてか惱みたるすがたにたてれど、萩、紫苑、朝顔などはよく生ひたちて、はや三四さきそめたり。十日ごろよりやまさかりならん。





八月五日兼題　綠蔭散歩

天

立ちやすむ袖にも露のたまちりて
　しけるこのはのかせのすゞしさ
肥後國熊本市白川新屋敷町堀榮一方　木川里子

地

ゆあみして庭の植木のしたかけを
　すゞろありきのこゝちよき哉
三河國寶飯郡下地町　永井さい子

人

夏の日のあつさをよそに思ふかな
　みどりの蔭のそゞろあるきに
肥後國菊地郡城北村　德永萬壽子

秀逸　（十五首）

川ぞひのしだりやなぎの蔭ゆけは
　夏としもなきゆふ風ぞふく　佳山幾子

みどりなる木立をもるゝ月かけを
　めてつゝありくたもと涼しも　武政常盤子

ふかみどり涼しき蔭にたちよるは
　ゆふべの風とわれとなりけり　池田幾子

たつねきて思ひ〳〵に涼むかな
　ならのしたかけ松のこのもと　名取正代子

しけりあふ木蔭をよしと風さへも
　そゞろにかよふ夏の夕ぐれ　坂田きみ子

うちつれてあすもとはなん夕風の
　涼しくかよふならのしたかけ　野木常子

幾たびかゆきかへりつゝ秋かせの
　かよふこかけに今日も暮しつ　綿野りき子

またもこむ茂る木蔭のすゞしさに
　つねにはうときもりのした道　河田いし子

明日もまたきてやあそはん綠なる
　松のこかけはなつとしもなし　海島信子

照す日もうとくしけれる森かけの
　そゞろあるきそ涼しかりける　江口とみの子

夏なから深き木かけをとめゆけは
　秋のこゝろあるまつのしたかせ　穗積稔子

暑けさをでゝに忘れん立ちつゝく
松のでかけを行きかへりつゝ　林久子

暮るまてゆきつもどりつ遊はまし
かせもはてなき千代の松はら　廣田とめ子

涼しけに松のしたかけゆくひとの
袖には千代のかせも吹くらむ　諸井久良子

ゆきかよふ袂につゆのたちそひて
みどりの蔭そすゝしかりける　小曾根ゑら子

しけりあひて照日よそなる松蔭の
すゝろありきのおもしろき哉　降田まさ子

（以下原稿到着順）

あさかせは露をはらひてしけりあふ
あをはをわくるそてのすゝしさ　佐々小琴子

おのつからちりをはらはぬ庭の面は
そぞろありきもいつかしがもさ　佐々宥鄰子

暑き日もわするゝはかりすゝしきは
しけるこかけにあそふこのころ　右田藤子

いくたひか行きつもどりつすみ田川
ゆふかせすゝしはさくらのかけ　石川頴子

若かへてしける木かけのすゝしさに
今日もひねもすゆきかへりつゝ　石川樂子

立かへりさへさもあかす繁りあふ　石川久子

みさりのかけのかせのすゝしさ

今日のみはあつさをよそになつ木立
みさりのかけをしたひくらしぬ　香川頴子

吹く風にあをはそよきてこずゑなる
せみのこゑさへしかすゞりけり　西艶子

河かせになひくやすたのやなきかけ
いさもわかこさあそふけふかな　尾立さみ子

みさりかけおるきて見れは春の日の
はなもおよはじしける木のもさ　高木ふさへ子

思ふさち打かたらひつすしさに
あゆむもうれしまつのしたかけ　高島壽子

深みさりすゞしきままに立ちよれは
なつをよそなるならのしたかけ　奘奈井芳子

あつき日もみさりの山のかけゆきて
あゆめはあきのここちこそすれ　杉浦芳子

まつかせも秋のこゑするしたかけを
ゆきつもどりつあそひぬるかな　狄野こはき子

すゞしさに志けきこずゑの下かけを
おとろきもなくくらしつるかな　廣田しも子

生ひしける木々のわか葉のみさりなす
かけゆきかふもすゞしかりけり　土肥仙子

青やぎのいさまなき身もわかはさす
みさりのかけはたちうかりけり　玉井隆子

はな散りて人はなけれさしけりあふ　西元花子

みどりのかげぞすゞしかりける

しげりあひてみどりおぐらき下かげは　四元豊子
ゆきこふひとのたもとすゞしも

つゆもひぬあをばしたたる下かげは　梅園雪子
たちよるそてにもなつなかりけり

あさつゆにもすそぬらしつ若みどり　雪園清子
しげる木かげになつもわすれて

なつながらあき風かよふこゝちして　水上仲子
しげるはやしをゆきもどりする

しげりあふ松の木かげにゆきかへり　水上なを子
なつをわすれてあそぶすゞしさ

ゆきかへりひろふ青葉のたまかしは　日吉あさ子
すゞしきかげにくらす今日かな

立よればなつも忘るゝやなぎかげ　東野けい子
またゆく水にあつさながれて

青葉ふくかぜに木の間のつき見ねて　東野篤子
ありくもすゞしもりのしたかげ

みどりなす松の木の間をぬひゆけば　川中たづ子
すゞしくもるゝなつの夜のつき

堪へかねしあつさもいつか忘れけり　金森倹子
もりの木かげのそゞろあるきに

なつごろも行く手も涼しかげふかき　宇多田楊子
わかばのしたはかぜもかよひて

行きてみんやなぎの木陰たどりつゝ　羽田三緒子
ひともすゞめるまつのもとまで

けふもまたすゞみにゆかん日枝の山　河田ふく子
しげるこかげをそゞろあるきて

すゞみするそゞろにたどる柳かげ　國廣きさ子
なつをゆめなるこゝちこそすれ。

しげりあひて風のみ通ふしたかげに　竹村貞子
たちよるそではすゞしかりけり

みどり木のかげを歩みてゆふなきす　小野田八重子
こゝろも身をもそゝぐこゝちす

緑り葉のかげをたどりてきて見れば　安井うめ子
こゝろすゞしもあきならなくに

若葉そふ木かげをさしてたどりつゝ　磯野たま子
そゞろありきのおもしろきかな

夕さればをぐらきにはのなつ木たち　木村きく子
しげるわかばのかげにあそばん

ことさらに風もにほへるなつこだち　田中ゑん子
みどりのかげをふみつゝぞ行く

堪へかねしひるの暑さもうちわすれ　森野梅子
みどりの木かげあゆむすゞしさ

すゞしさをたもとにしめて風かよふ　近藤ふく子
まつのしたかげゆきかへりつゝ

暑さをばしばしわすれぬわがにはの　山手てい子
みどりのかげのそゞろあるきに

若葉さす木のしたかげみおささねて　田部里子

なつさも志らぬかせのすゝしさ

かせ渡る小ならかし葉のかけふめは
なつもよそなるこゝちこそすれ　山田瑋子

友をさそひさまよひ居れはしけりあふ
まつの木かけのなつさしもなし　得田仲子

夕ぐれをまつのこかけにさまよへは
みさりしたゝり扇もしみにけり　得田琴湖子

夕くれぞたのしかりけるつきにほふ
あをはのかけのそゝろありきは　宇高まつ子

夏木たちしげれるかけにをちかへり
ほさゝきすきくころさなりけり　野中あさ子

かせわたりつきかけもるゝ木下かけ
そゝろありきぞすゝしかりける　重松たか下

おもふさちけふも來にけり風そよく
すゝしさあかぬまつの木かけに　宮地琴子

しけりあふならの木かけのゆふ風に
あつさわすれて立ちさまりけり　松本わか子

みづねさす木のした陰に立ちよれは
さながらあきのこゝちこそすれ　弘田ゆき子

風かよふあをはのかけのすゝしさは
あきかさのみそたさられにけそ　田口志め子

吹くかせにそゝろありきもいくかへり
なつおもほねぬもりのしたみち　原ひさね子

かせ絶ねぬ青葉のもりのしたかけは　上條いそ子

行きつくしても去りうかりけり

夏しらぬあをはのかけはかりそめの
そゝろありきもいくかへりしつ　村上かよ子

思ふさちたもさつられてあそはまし
みさりしけれる木々のしたかけ　伊東美代子

そこさなくひはらまつかけ下ゆけは
かせのたねまもすゞしかりけり　植木鋼子

たへかたきあつさのころもみさり木の
かけをありけはすゞしかりけり　失名

生ひしける松のこかけをそこはかさ
さまよふはかりすゞしきはなし　臨原萓子

風わたる木のしたかけにたたずめば
なつはこゝろにかよはざりけり　谷野幸子

たちよれば暑さなかれてしみつわく
このしたかけはなつなかりけり　上野君子

深みさりしけるこかけをはらからさ
そそろありきそたのしかりける　富士村巖子

夏木たちみさりしたゝるにはの面に
あゆむゆふへはなつもわすれぬ　富士村ひさ子

茂りあふこのしたかけをたさりけり
そゝろありきにあつさわすれて　仁保志ま子

松のかけたけのはやしさりわけゆけは
すゞしきせみのこゑそ志くるゝ　尾多鶴子

樂しみの一つさなりぬあさ日かけ　矢野うめ子

さしこぬほどのもりのしたみち

たへやらぬ夏の日なかはまつかけを
そゞろありくにしくことやある
榊原八千代子

風そよぐまつのこかけのすゝしさに
なつをわすれてあそびくらしつ
齋藤春子

あを〳〵と生ひ出る松のしたかけは
なつとも分かぬこゝちこそすれ
齋藤せん子

なつやまのかけにし行けば蝉の音も
いはもるみつにまがふすゝしさ
林季子

すゝみするならのこかけの夕ありき
このまのつきはかせそみせける
吉村ふて子

ゆきかよふ袖にかはかせかよひきて
こかけすゝしきかつしかのさと
柳田里子

なつもまた人はとひけりすゝしさに
すたのつゝみのこかけたつれて
舘脇ます子

ふかみどり茂るあをばのしたかけの
そゞろあるきはすゝしかりけり
池谷富子

なつやまはなへてみどりに木下陰
わけゆくそてもすゞしかりけり
戸塚銕子

なつ木立みどりのかけのゆきかひに
そてぬるゝまてつゆはそひけり
中桐杏子

立ちならふつゝみの櫻みどりして
かげふむひとのたもとすゝしも
吾妻ちか子

けふもまたまつのみどりの下かけに
萩原章子

たどりゆきつゝあつさわすれぬ

しけりあふ松のみどりのしたかけを
あゆみゆくこそすゝしかりけれ
北村左枝子

たちならふ松のこかけをたどりつゝ
そゝろありきそすゝしかりける
北村てい子

あすもまたきてや遊はんしけりあふ
まつのこかけそすゝしかりける
北村孝子

みどりよりみどりを分てそこはかと
なつのそとゆくもりのしたかけ
梶井久子

やすらへは木の下かけはすゝしさの
ひとしほまさるこのゆふへかな
林常子

しけりおふ木のしたかけは夏の日も
身にしむはかりすゝしかりけり
服部かつみ子

夏木たちあをばをわけてわがゆけば
さらになつなきこゝちこそすれ
森山英子

ふかみどりしけれる木々の下かけに
かゆきかく行き今日もくらしつ
長山孝子

なつしらぬ杉の木かけをゆきかへは
風さへあきのこゝちこそすれ
中澤ちの子

あを〳〵としけれるまつの下かけに
あそぶこゝろぞたのしかりけり
石川助子

八月五日兼題　海邊に遊ぶ

天　大坂市北區相生町百六十二番邸　梶井久子

千木の片そぎ高く聳えて、かけ渡したるそり橋いと小さく見ゆ、其下より、水際までしろ〲と雪の如き眞砂地に、青々と緑したたる松原は、老たるあり、若きありて、其木の間木の間に立てまうけたる亭の清げにて、いとみやびたる、これなん名高き住吉の濱なりける、玉をのべたる如き水際に、よせてはかへす白浪は、わだつ海の神のうちたまふ皷の音か、松に吹く風は天津御神の調べたまふ琴の音か、あなおもしろ、斯る景色を見、斯るしらべをきゝて、誰かは舞はであるべき、といふ折しも、沖の方遥に、ひらひらと見ゆる帆影あり、人々は、手を打ち、あれよあれよ、あれこそ誠によき舞なれ、やよ舞びめ、近う來よ、汝が白妙の袖を、風にまかせて、などうち興じ、あるはあまの子にまじりて貝ひろひ、釣するなど、其おもしろさ、其たのしさ、いつ盡くべくもあらず、されど、何れも女の身なれど、夜に入りてはたより悪し、いざとて、家路を急がすれど、さらどといふ色も見えず、とかくするうち、思ひもかけぬ浪のうへに、月いと涼しく浮びいでゝ、又ひとしほの興を添へぬ、人々は、いよ〲歸らんの心なし、さては古人の「住よしとあまはいふともながゐすな」といひしやうに、處から忘草もや生ひたると、いとあやしうてなん。

地　肥後國熊本市白川新屋敷町堀榮一方　木川里子

ちりばかりの曇だになく、朝よりてりはたたき、あつさいと堪へがたかりしを、日影やうやうかたぶき、みどりの木末より風もそよぎいでつれど、湯あみし、汗にしみし衣きかへなどし、二人三人の友どちいざなひ、ほど近き海邊にものしつ、青海原はしづかになぎわたる浦わを、そこともなく遊びありくたのしさ、いつはあれど、夏の夕暮は一きはになん。日は入りながら、なほほのかにあかき沖の島かげより、釣舟のこぎつれてかへり來るが、近づくままに、舟人の涼しげにうたうたふ聲のきこゆるもをかしく、かなたの磯の松蔭の蜒のとまやより、いとしげく蚊やりの煙立ちのぼり、霧にまがふまでたなびきたるに、

蝙蝠さへみつよつふたつとびかふけしき、畫にもかゝまほし。ものすろかゝげて、渚の眞砂をたどり、よせくる波に足うちあらはせ、凉しき汐風に袂をふかせ、ひるまのくるしさもうちわすられつゝ、時をうつしけるほどに、いつしか日もくれはてゝ、弓張月の影、ればつかなく海面にほのめきたる、ことにこゝちすがすがしく、をかしきながめいとあかねど、女の身にて、深夜になさんもいかゞなれども、心をかりを此所にとゞめて、今も波に落ちんとすなる月の光をしるべに、家にはかへりつきぬ。

人

麹町區元園町一丁目六番地　白井とな子

後には峨々たる高山つらなりて、前には渺々たるわたつみあり、山はさながら名におひて、屏風立てたらんが如く、海中にはさまぐの岩ども多く、岩にはくすしき松生ひ、靑々として白きまさご相映ずる事、四里ばかり、或は獅子岩といひて、獅子のけはしき巖をかけくだくる如きあり、或はむろ岩とて、室の形したるあり、鯛岩とて鯛の常にひらくとまはりに游ぐあり、遥に望めば蓬萊といふ山あり、名におふ畫工が、刻意にうつしていだすとも及ぶべきかは、實に水は山の影をふくみ、山は水の心にまかす、神仙のいはやともいふべからん、此の佳景のある所は、我母の故郷にちかき笹川村といふ所には、笹川流とぞいふなる。よにわか國の三景と稱ふる松島を見し人も、一度此景を見ては、かしこにまさるとももおとらじとぞ感じあふなる。舟漕ぎ出でゝ、海中よりはるかに見る時は、其奇觀亦一入なり、我れこゝに遊びて、朝には里の子と打つれて磯貝を拾ひ、夕べには濱風に吹かれつゝ沖の方を眺むれば、海人の呼聲かすかに聞えて、舟こぎ歸る様など、實にいはん方なし、颯々たる松風の音、淙々たる浪の聲は、朝に夕べに、妙なる神仙の樂を奏ず、かゝる土地にすむ人は、自然に其化を受けてにや、すなはにして眞心のにはやかなる、村民の情多き、さながら骨肉のこゝちぞする、此の佳境は、未だ人の知る事稀なれば、一點の塵影をとゞむる事なく、松風明月いよく以て淸なり、かゝる景趣は、已が如きかたくなゝる筆を以て、えつくすべきかは、幾多の奇想に富める人の、此美景の美をうつす事なきぞ、いとをしきか

ぎりなる。

（以下原稿到着順）

輕部壽子

暑さに向ふに連れ、海邊の遊樂面白き時節とはなりぬ、備前國兒島郡味野村及下村等に於ては、此頃汐干の時に乘し、三々五々群をなして彼方此方に逍遙し、あさり貝しやぐまなどの類を拾ひ、或は藻じき網と稱する、横四尺許の小きふくろ網を携へ、磯に添へる淺水中の藻上をかけば、鰈を始め、なこぜ牛尾魚又は章魚なんどを、容易に漁しうることと頗る多く、海原のけしきは一しほにて、かれて出入の船人ども具しゆけは、心おきなく、山邊の樂みとはかはりて、海人に立交らむもいと興あり、この暑き日をも打わすれ、日のくるゝをも忘はす、遊びたはむれたり。

右田康子

夏の日の暑さたへかれて、しばしなりともやすまはやと思ふ折から、親しき友おとづれて、そゞろありきせんとの事なり、よき幸かなとて、午後二時過、いそぎ髮かたちなどとゝのへ、いつこともなくありくうちに、海邊に出て、保養の爲め、友の湖に入らんと云ひけるに、げにもとて、体を浴し、大海原を見渡せは、さか〳〵とうちよする波濱べに鳴きわたる鳥、とり〳〵面白く、見はらさるゝに、日はかたふきぬ、この海べより出までは、少しへだゝりたる所なれは、歸りつきしはたそがれ頃なりけり、驚きつゝ、あな久しく遊びしかとたもへども、今日のけしき目の前にうかびてなん。

佐々有鄰子

母かきのへたてなき友二人三人うちつれて、近ごろのあつさに堪へかれ、いづこの海邊にてか海水浴せまほしさ、汽車にのりて、すがのれの長須の浦につきぬ、ここなん景行天皇の西巡ましし時に、靈の兒どもが、腹赤魚つりてみけに奉りしといへる所にて、南西北の三面は、在明海ともいひ、肥前の溫泉嶽を島山のぞみみる苫屋になんありける。やかて、海邊にうちよする樂濱に、ものひもときて、白妙の衣に姿をやつし、友達のわれさきにと、汀とほくかつぎ出たるさまを、今日の前にみるものから、妾もふたつみつ波かきわけつる心のうち、いともすすしく、たのしき今日の遊はつきぬに、日もゆふくれになりぬれば、汽車よりかへりきて、窓下にしるす。

東野けい子

土さへさくといふ夏の日盛、旅の宿はましていぶせく、暑さわすれんすへもなければ、市中のさわかしきちまたをはなれて、涼しき處もかなと、はらから三人打連れ立ち、海邊にいでぬ、白たへの眞砂地廣きか中に、幾本とも知られぬ老木の松、青々として、通ひくる風も、ことさらに涼しく、袂をふき、はや暑さをも忘るゝ斗になりぬ。雲か濱かの限り知られぬ青海原に、照る日の光のきらめきて、黄金の色なる波の上に、ゆきかふ釣舟のさま、ゑもいはれず、ゑにもかゝまほしき景色にて、彼の雲井にまかふといひしふる事とも口すさみつゝ、濱づたひ行けは、磯うつ濱にくたけてちる梅の花貝櫻貝など、家づとにと拾ひ集むるほどに、いつしか日もいりはてゝ、濱にうつりしくれなゐのうすらぎ行くも、いはんかたなく涼し。

川中たつ子

幸ひけふは土曜日なり、かれて堺の親類より、久々なればこよとのたよりありたれば、幼き妹をともなひて、堺へと出て立ちぬ、やが

て其家へ着きにけり。叔母なる人は、喜びて、ひか〴〵しくもてなし、しばし物語りなどなしゐたりしが、まだ時間もはやければ、これより大濱へ行かんと、仰せらるゝに、うれしくて支度とゝのへ、やがて大濱へ行きつ、市中の雑踏にあきたるわれらは、まつ海邊の渺々たるにおどろけり、妹は何よりさきに、珍らしき貝からなどを拾ひつゝ、はやわれを忘れ顔なるもをかし、さゝ海の面を見渡せば、海水は緑をたゝへて、わづかに小濱なうちつゝ、岸邊にかゝる様など、いひしらずをかし、しばし忙然としてたゝずめるうち、はや日はくれなんとして、日影のあかくかゝやけるが、濱の緑なるに映じて、時ならぬ濱間に紅を呈せるなど、いはん方なくあはれにて、日頃のものはづかしさもわするゝばかりなり、されど叔母君の近き所にしあれば、又かされてこん、けふはこれにて歸らなんと、うながしまふに、是非なくて、今少しなりたしなど、せがむ妹を引き立て、貝細工かんざしなど買ひとゝのへ、叔母君の家にもどりけり、其日の樂しさをわすれかねて、かくなん。

宇多田やう子

螢窓の下、このころの暑をたへ、文讀む斗りは身のほども考へられわれは、休暇を幸ひ、大磯さして出て立ちぬ、こゝは名にあふる海水浴場とて、多くの人もむれ來り、中〳〵ににぎはしくぞありける、青海原、見渡す限り大島三原山のはて見ゐて、さつ〳〵と吹き通ふ風清く、濱邊に近き大磯小磯には、さかまきよする大濱小濱の、砕けて玉と散るさまなど、いつしか都のちりも洗はれて、いと面白の眺めたくひなの涼しさなり、かゝる處に宿居して、朝な夕な歌よみ文つゞらんには、いかはかり心も養はれんと、夏のよそなる心ちし

てなん●

安井うめ子

ある日曜日のことなりき、妾ら親しき友がき、みたりよたりうちつれて、いざおもしろき濱邊にいでゝ、遊びくらす時しも、波風しづかにして、大海原のおもは、たゝみしきたらんごとく、をちこちには大船小舟の白帆あげて行き交ふも心地よけなり●濱うちよする汀際には、貝などあさるもあり、小さき魚などのうちあげらるゝを、をかしくわらそひて捕へんとすれど、おどろき去りゐるを、いと口惜しなどつふやくもあり、はては裳裾のぬるゝも知らず、時の移るも忘れて、浮かれ興する間に、惜しき日はまたく落ちぬ、あはれ今日ばかり樂しき遊ひは多く得がたからん、げに學びの後の遊びほど、樂しく心ゆくものなしとは、これらを云ふならん、まいてへだてぬ友とともにするにおけるをや●

山手ていこ

夏とし云へば、あつかるべきことゝ、年毎の習ひなれど、ことしは、わきて、雨てふもの少しも降らで、日毎にてりはたゝくのみなれば、一しほ堪へがたう覺ゆれど、黄金もとけなん日中は、何とせんすべもなければ、晃がうしつゝ、夕べになるを待ちつけ、湯あみなどして、母上と共に近きわたりの海邊に至りぬ。海原ふき渡る涼風におもてをふかれつゝ、汀の岩に腰打ちかけ、今出でしほの月をながめ、友よぶ千鳥をなつかしむなど、風情多き事のみにて、晝のあつさもいづこへやらん消ゐ行く心地するにぞ、ことしは出で湯あみなど思ひ止まり、此なつかしき浦風を友として、苦しき夏をたのしく送りはべらんなど、云ひ出でつるに、母上の、さらば、そなたは心ゆくま

でながめ來よなどのたまひつゝ、はや歸らんとしたまふにぞ、心はあとに殘りつゝ、家路にかへりて、一ことかくなん。

田部里千

さみだれのくもりがちなるも、やう／＼晴れわたり、うらゝかなるに、いざ海邊の逍遙なさと、たまあへる友垣いざなひつゝ、そこはかとなく浦傳ひすさびあるくに、ふく風になみの白玉うちあげて、おきのあなたに、舟どものあまたうたひのゝしりこぎゆくなど、夏のうみに秋の木の葉しも散り浮むやう見わたる、やがて、とあるいはのかたそばにこしうちかけ、ながむるまに／＼、あるはいさりのすがたは、苫屋の煙、ゑにかゝばかへりて心のいたりすくなからん、さてはゐしもおよぶまじなど、めづるもをかし、いさぎよきまさごのあなたこなたに、玉や貝やとひろふに、かぎりも志らず見ゆれば、いざ家づとにうるはしきをと、おりたちつゝ、とかう日のかたむくとへわすれて遊ぶまに、かの貫之ぬしの、今夜の月はといひけんごとく海づらより影ものどかにいでゝ、げによきうみにとおも惚ゆれど、かひなければ、うちすてゝたつしもをしき浦なみのなど、うちかまけつゝかへりぢにつきぬ。

江口さみの子

今日の暑のせんかたなう思ふ折から、へだてなき友のおとづれぬ、いとうれしうて、名島にすゝまんとうちつれて出で行く、道すがら暑さ言はんかたなく、かの臺灣もかくやなどかたらひて、汗おしのごひつゝ、からうして著きぬ、こゝは昔し神功皇后三韓をうち給ひて歸らせ給ひしとき、御船の著きたるといひつたへて、その檣の石となりしなど云ふ、今ものこりて、いとめづらし、沖のかた見わたしたるけしき、たとへんかたなし、又小早川隆景の城のあともあり、豐臣氏の供して、細川幽齋の、何もなしまのとよまれし辨才天は、今尚詣る人多し、今日は海の面いと靜かにて、沖よりいりくる帆かけさへ涼し、暑さもいつか打忘れて、童のかひいろふ樣のおもしろきに、我もおり立ちてあさり見るは、三つ四つ見出しぬ、いとうれしく、家づとにせばやなどいへば、われは歸さもおもはぬものをなど、友のいふもをかし。

得田仲子

文月のなかば頃、一里ばかりへだゝりたる濱邊の、祖母のもとより、久しうそちのかほみぬことよ、はまも日毎になぎぬ、すなどりする業見たしなどかれていへるがあすは我里等のほんにてもあれば、墓參がてら來よなど、のたまひおこせしかば、つれ／＼なるまゝ、いとうれしくて、あくるあさ、とくおき出で、第一人打つれほど遠きにもあらねば、かちにて行きぬ、稻葉の上にぬきちらしたる露の、いとひややかなる田道を、北へまはり西へまがりてわけゆくほどに、得も忘れぬ小松の間に見ゆる家の、軒いと靜なり、弟は先ひたはしりに走りて、かけ入りぬ、家に入れば、祖母の君いとうれしげに、なにくれともてなしたまいつ、とかく話して打すぎぬ、此日はわけて日もうら／＼とてりはためき、あつさいふばかりなし、夕つ方より皆々打つれて、涼みがてら濱邊に遊ばばやとて立出でぬ、みどりにつゞく小田道をしばしわりゆけば、こゝは早や見渡すかぎり青海の末まで見わたりて、水島の二つ三つ浮べると見ゆるがやうやう近つけば、釣舟なり。水いと清く波穩かに、砂子の清き事、霜をかけるが如く、日やう／＼海の中へ沈む頃は、月いとあかゝくすみ渡り

て、波間に浮ひ出づる影いとすゞしく、そゞろにふきくる風も身にしむばかりなり、白休[illegible]曇らぬ空や久方の月海上に浮んでは兎も波を走るといひし、竹生の島もしのばれて、心もそらにあこがれつゝしはしたゝずみて打守りぬ、やゝありて、ころもでのいみじう冷ね亘る頃、うながさるゝまゝ、打つれて歸りぬ、いとあかぬ心地して、立ちうかりけることこのかぎりにこそ。

弘田ゆき子

一日、學びの友の誘なふままに、母をもすすめ參らせて、夕暮より、鏡川の下つ瀬に舟を浮べ、桂の濱の邊まで漕ぎ出てつるに、四方の山の緑は波にうつりて、その景色のすがすがしさ、いはむかたなし、折しも波を蹴立てて馳する蒸滊船あり、或はま帆片帆風にまかせて行く小舟あり、そよと吹き來る風の涼しさに、夏も忘られて、あはれ此のあたりに住居して、浮世の佗しさを遁ればやと思ふ程に、やがて月影の山の端を立ちはなれて、いと面白き景色に、友ごちの、筆とりて物考ふるは、歌などつすらむとするなるべし、かかる中に、夜もいたく更けゆけば、殘り多けれど、船をかへして、もと來し方に向ふ折しも、遙けき彼方に見ゆる岩は、是なむ秋岩とよぶとかや、されば其の名をゆかりに、此の涼しさをも包みて歸らまほしと、思ひつづくるに、舟ははや岸に着きぬれば、友ごちに別れを告げ、家に歸りぬ、げに今日の遊びは、樂しさの極みなれば、日數經て後の思ひ出て種にと、かくは谐いしるす序に、

棹させば浪に若葉の影ゆれて
見る目すずしき夏の海面

加屋ひさ子

なつかしき友うちつどひて、海邊にものしぬ、折柄陰暦十五日なりければ、干潟いと遠し、人の夥しく籠を携へ出つるは、貝ひろはむとてにやあらん、沖のかなたに、つり小舟かずまへかたきまで浮へるは、秋の木の葉の散れるにさも似たり。海士人のあさりする樣なと、とり〳〵になかしうて心はとみに晴れ行きぬ。見てのみやみなむは、いとあかぬ心地せらるれは、しほ干狩をとうながしぬ、一同もよろこひ應しぬれは、うれしうて、そこら拾ひありきしが、巳に潮の滿ち來ぬれは、いそぎ岸にあがり、歸途も今日の興をくりかへしつゝ、いつしか家にかへりけり、このたのしかりしこと、るすかに忘れかたうてなむ。

福原菫子

照りはたゝく暑、いとたへがたければ、今日こそはと、へだてなき友、たれかれと打ち連れたちて、程遠からぬ、茅渟の海邊に至りぬ、渺々たる碧海には、暑凌かんと、小舟浮べて釣するもの、網するもの、あるは泳げるものなと、さま〳〵なり、うちよする浪の音さむく、海面渡るあら〳〵しき風は、肌にしみて、しかすがに夏としもなき心地して、暑し〳〵と言ひわひし身も、今日はさむし〳〵と身をちゞましつゝ、磯つたひては、形をかしき貝など拾ひ、日のくるゝをも知らさりしが、つれの者に、はや人々はかへりぬ、とくかへりまさずや、夜露のかゝらんとうながされてせん方なく、ひとりとゞまるよしもなければ、また明日の日と、家にかへりぬ。

名取正代子

今年もいつか春過ぎて暑き日の眞盛とぞ成ぬる。されば、年毎の例によりて、苦熱をさけばやと思ひ立ち、江の島に遊びぬ、此地西は

富士箱根の山より、大磯わたりの海なのぞみ、南は限りなき千尋の大洋に連り、四方の眺、いづれめでたからぬはなし、退潮の折々は、貝など拾ひ〳〵て、そこはかさなくそゝろあるきしつゝ、七里ヶ濱由井ヶ濱わたりの、そなれ松の木陰などに凉みす、又此島の南の端に某の神を祭れる窟なりて、中に辨財天女の像もありさ聞きて、いてまうでぬ、又其南に、ちごが淵さいふ所あり、ごゝにはあまの見等打むれて、ぜにこはん料にさて、水深かくゞり入り、貝なご取りてすゝむ、よりて錢を水中になげ與ふれば、これを探るいさ面白し、おのれは山國に生れたれば、海邊のけしきの、何くれさめづらしうて、夏もわすれつ、家路さへも打忘らるゝばかりになん。

林　久子

二人みたりの友さいひ合せ、博多のみなさより小船にのり、名島に行きぬ、まつ辨才天の御社に詣てゝ、小高き處のまゝやがなる家にいこひつゝ、みれは、たたら川なへたてゝ、濱邊つたひに千代の松原の見ゆるもすゝし、この志賀のしま〳〵を、ひさめに見渡して、そのけしきいはんかたなくなかし。しつかなる波の上に、大船小船の行通へるも、繪にかきたらんやうにて、いさおもしろく、おのかゝ歌よみ文作りなさして遊ふまに、入相のかねもなりぬ、立ち出つれは夕月の影おもしろう、あかぬ心地のせられて、こぎいつる船も、こたひはおそかれさのみかたらふうちに、博多につきぬ。

廣田とめ子

かたく\に物學ひに行たりし友さち、暑中休にて、古里に歸りきにけり、されは、久しふりにていわけなき時の友打より、へたてなく遊はまほしう思へさ、たゝ家につさはんも暑し、されは程近き箱崎の浦こそよけれ、いささ打つれて物ゝぬ、千代の松原ゆき〳〵て、箱崎の宮の御前につきぬ、先つかたみまうてゝ、後ち海邊にきて見れは、さすかに暑さも忘るゝはかりなり、いまこゝらにさ、波きは近き松の木陰にまさゐして、さり〳〵、昔今の物語しける程にひさり立ちふたり立ち、はては皆むしろはなれけり、もすそ高らかゝけて、波に入るゝあり。はためづらしき貝なさ拾はんさ、脛打かゝめてありくもあり、あるは大きやかなる波の打かゝりて、しさろにぬれたるはいさをかし、さり〳〵離けに遊ひし程、いつしか日は能古の島かけに入りぬるそ、いさ口をしかりける。

箱崎の浦おもしろく遊ふ日は
　ふりはへて來しかひも有りけり

宗岡しゅん子

今日の日盛もやう〳〵すきぬさ思ふ折しも、みやひの友ふたり三たりさふらひ來て、今より釉の湊の夕しほまちて、共に遊はまし、いまさ、そゝのかさるゝまゝ、打つれてきにけり、さすかに汲きはゝ人ゐけし、されは船にのりて、少しこき出てぬ、波もしつかに、いさ心地よけれは、

ふりはへて釉の湊にきて見れは
　いつしか秋の風そ通へる

なさ口すさふ折しも、雲のさはりなく、月の出でければは、

かたしきの釉の湊こなわか物さ
　主顔なる波の上の月

さ、友のいひ出たるは、いさ〳〵おもしろし。

吉村ふて子

土さへさくへきあつさに、たゝあへきつゝありしに、したしき友のさひきて、ほさちかきあらつの浦のいそこすなみのすゝしさは、けに浮世をよそなる心地するを、いさやけふもうらつたひしてあそはんさそかのかせは、打つれていてぬ、はまかぜにたもさふかせつゝ、はるかなるおきのほかけをみて、すゝしさをうらやみ、あるはうちよするなつわすれ貝ひろひなさしつゝ、夕月のかけさすまてあそひくらしぬ。

降田槇子

海邊近う住みなせる友の、そゝのかすまゝに、父母の許得て、その許に至り、次の朝、さくより海邊に遊びぬ、をりしも夏のならひさて、空はくまなく晴れ渡け、そよ吹く朝風の除るに蟬の羽のうすき衣纏ふぞ心地よき。さて海の面を見渡せば、浪いさ静にして、たゞ一面の鏡のやうなるが、はるかのかなたにては、空さ打つゞき、いづこを水ども空さも見分け難く、そかあたりに、眞帆はりたる舟の、三つ四つ浮ひ居ける、げに面白の景色にて、見なれぬおのが目には、いさも〳〵めずらし。又かなたの沖には、小さき島ありて、さきはなる松の生ひ繁ける様、得も云はれずをかし。余りにけしきのおもしろさに、言葉も出さすなかめ居たりしか、ふさ浪の上を、何にやあらん、鳥の二つ三つさひ行きたる、畫にも書かまほし、さかくするほどに、なりもよくひき潮さなりて、近き邊り干潟さなりければ、いさ嬉しさ、もすそかかげて下り立ち、眞砂の中をあさり見れは、様々の美しき貝などのあまたあるを、持ち來りし小き籠に、ひろひては入れ入れてはひろひ、しばしば余念もなかりしが、いつしかかごにあまるほどになりければ、あなうれしさ、友にさし示せば、幼子のわざよさわらひたる、いさにくし。今迄は心づかでありしが、いづこより來りけん、あまか少女等、あまたなりはひの爲にや、かごををおひて、をちこちさまよひつゝ、貝にやあらん、小魚にやあらん、さり居たる、げに畫にがきたらんが如し、

貝ひろふあまか少女に立ちまじり
　われもひろへりこにあまるまで

など、思ひめぐらしたるもをかし。やがて日の高うさし昇りて、暑うなりければ、名殘惜しくも、友の家へぞ歸りにける。

庭螢　　大竹伊勢子

いし山のつさにもらひしこのほたる
　せはきにはにはひかりみちけり

首夏風　　河野文子

あをはさすかつらのかけの夕あそひ
　つきまつそでにかせかをるなり

氷　　森田增穗子

玉まりにもりしけつり氷手にされは
　こゝろまてこそ冷ねわたりけれ

女鑑を見て　　仝

もろ人の手にさきあけしひめかゝみ
　うつすこゝろもすみわたりつ

夕立晴
風そよく木々のこずゑに露ちりて
志はしは涼しゆふたちのあと
安井章子

田家水鶏
人さはぬしつかいたさな夜なく\に
たゝくは小田のくひななりけり
金森俊子

月前蛙
夕月のかけもさやかに見ねそめて
なかるゝみつにかはつなくなり
仝

瞿麥
しきしまのやまさにしきさ見ゆる哉
つゆにひもさくなてしこのはな
山田璋子

泉
秋風もかよふはかりにすゝしきは
いは井の水のおさにそありける
稲原董子

夏風
なつころも吹きくる風のすゝしさに
まちこしあきもわすれつるかな
山崎しつ子

折にふれて
あさぢふの露もみたるゝわかそてな
なぐさめがほに月のさすかな
矢野うめ子

遠方の友に
ゞろさもに宿るたもさはかはれさも
しほろはおなし夜半のつきかけ
高田きよ子

◎女鑑月並兼題

八月廿日　歌……鴈信　文……團扇　八月十日〆切
九月五日　歌……野逕秋　文……蜘の網を見て　八月廿五日〆切
九月廿日　歌……松間月　文……辞書の撰擇を乞ふ　九月十日〆切
十月五日　歌……籬菊　文……園先の凉日に友を招く文　九月廿五日〆切
十月廿日　歌……溪邊紅葉　文……茸狩の記　十月十日〆切

歌文兼題は必ず〆切期日迄に本社に到着する樣送らるべし。期日に遲れたるは總て沒書とす。

常陸帶

朴翁居士

千歳山のふもと、尾口の里に、身をようなきものに思ひはふらかしつるうむそくありけり、わかゝりしほどは、玉しきの都のうちくれ竹のそのふにあぞびて、みじかきつかさくらゐにはだされつゝ世をいとまなうのみれくりすぐし侍しが、つねに播隙のはいふかうして、つひに五十年の秋をむかへてかくれたるすみかをしめ、座禪讀誦の窓の内に世の中の無常をさとりて如露亦如電の觀をなし、身のうへの有爲をいとひて遠離諸幻の念をこらし、獨處山林は法華の妙文、制心一處は遺教の金句なり、されど隱居の師友は佛のみちにまさりたる事あらじとおもひとりて、當社は元明天皇和銅二年出雲の國大社より影向まし〱て、この所に跡をたれたもふよし風土記にも鎌倉の御敎書にものせられたり、類聚國史に、弘化九年十二月乙丑桑田郡出雲社預名神と見ゑたり、第一宮のよしは延喜式にあきらかなり、正一位の事は後西園寺殿實兼公日記にしるされたり、その外三代實錄、東鑑、兼好法師のかけるものなどにもこの御やしろの事見ゑ侍れど今さら翁がつたなき筆にしるし奉らんも中々かたじけなき事なるべし、御本社は素盞嗚尊、稲田姫、上の御前は大巳貴命、三穗津姫にておはします、これすなはち社中の文書に確證あり、なほ異說あれども社家にもちひず、當社をよめる歌ふるくはいまだ見あたり侍らず、

夫木集并泉和尚の記高範家集などに入たるをこゝにうつし侍り、

うこきなき千年の山のみつかきは
久しき御代のしるしなりけり
頼氏朝臣

わかたのむちとせの山の宮はしら
すぐなる道をなほやあふかん
等持院贈左大臣尊氏公

こゝもまた出雲八重垣しめ引きて
神代の春をいはふさとひと
藏人太夫高範 號千秋

妻籠のむかしかたらふほとゝきす
出雲のかみもあはれとやきく
長松軒惟翁

神託の和歌とていむといふけがれをいへる日の本の神の數をしる人ぞ神といひつたへ侍れど出所たしかならざれど一決しがたし、禰宜廣瀬氏をたづねていとまごひしつつ出雲坂を登りてかへり見れど、我がかくれがの木ずゑもいちしるく見ねてさすが名殘れはをしきものから、

ちとせ山尾上の里の朝かすみたちかへりても見まくほしけれ

四郎禰宜をはじめ、かれこれ送りきていますこしなど、いへどしひてこしらへ歸しつ、七

谷をいくたびとなく渡りて、

鈴鹿川ながれやかよふこゝもまた八十瀬をわたる七谷の水

原の里の入口に山城丹波の界あり、玄旨法印の歌とて「山しろの原のよろひ田来て見れ
むかふとの牡丹弓かさの松」といひつたへ侍り、時しも愛宕おろし身にしみていとさむ
し、

わたこ山ふもとの原の里さむみ花まちとほに見ゆる木々かな

水尾村を過るに、清和の御廟は松かげふかくしげりていとさびしくをがまれ給ふ、西行
法師が、崇徳院の御廟にまゐりて「よしや君むかしの玉の床とてもかゝらん後はなにゝ
かはせん」とよみしもよそならず覚え、かつは文集古墓の詩などおもひ出侍るまゝかし
こけれど、

八隅ししわかすべらぎの塚とてもふりにし後はたゞ春の草

清瀧川をわたりて嵯峨の里に着ぬ。

しづかなるわか山すみを立出てうきよのさかに又もきにけり

ちとせ山より嵯峨までわづかに三里か程なれども、谷峯はなはだけはしうして、肩輿を
になふやつこども、つかれためりとて仁和寺なる春光院僧正の御坊へたちよりやゝひ

さしくやすらひて都にいたり、湯川氏のもとに逗留し侍るに、かなたこなたよりよびむかへて馬のはなむけしつゝ日ごとにいとまなし人々送行の詩歌發句など數おほけれど中々にもらしつ。

十二日（元禄十年三月）都を出て粟田山のほとりまで、三郎爲興などわりごやうのものたづさへ來てなごりをしむに、仲秋のころはかならず歸りこんなど約しつゝ、

かへりこん秋をちぎりて行雁のおなじつらなる春のわかれ路

山科を過てあふ坂にかゝる、關の清水は、

さら／＼の影もはづかしあふ坂の關の清水はむすひしもせじ

といひてうち過ぬ、予、竹園にさぶらひしころ東行いくたびといふ事なし、（故大樹將軍家綱公は後妙法院良親王の婿君なり予御外戚の御よしみにし毎年歳首の賀使をつとむ）年わかゝりし時は筆まめやかにして名所むまやちをもこまやかに志るし、人わらへなることしをれ歌をもをりすぐさぬ程にとこゝろざし侍れど、今は手ふるひ、まなこかすみて、道の記といふものの書つけんともおもはず、いはんや三十一字をつらぬべきいとまには六字の實號を稱へ、または千部の數をみてまくはしく、法華讀誦を肩輿のうちの所作として、いつこの名所にもめをうつすまじうおもひをさめながら、ともすれば舊染のくせにそゝのかされていさゝかものにかいつ

くる事になりぬ、されど都より江戸までは、まへ〳〵の紀行にもくはしくしるしたれど、老のくりごとさのみはとてれはくは略す、いつしか栗津か原を過て勢多の橋を渡るに、めしぐせるものどものあれなん石山寺よといふを聞て、南無救世観世音ととなへ奉りながら、

たのむぞよわれ世の中のことたれてしめしが原にくちぬちかひを

こよひは草津に草のまくらをむすぶ。

十三日　草津を出てくるに、鏡山ほのかに見ゆ侍るといへば、

わがすがたうつさばいかにかゝ見山しらぬおきなの心地しぬべき

石部水口(ミナクチ)など過て土山を宿とさだむ。

十四日　鈴鹿山をこゆるほど雨しきりにふりてものうさのまぎらはしに狂句、

春雨やふつた〳〵すゞか山

權現の御社ををがみ、八十瀬川をわたるに、

八十瀬川またやわたらん七十年をこゑてくるしきさら〳〵の世に

伊勢参詣もあまたゝびなれど、今はこの世のまかりまうしにとて、關の驛より、右のかたにわれもむきて安濃の津をすぎ雲津に宿す。

十五日　天氣うらゝかにして神明の冥助もたのもしく、度會郡宇治の郷神路山五十鈴の川上内宮に參詣す、天照皇太神一坐、相殿に手力雄命、栲幡千々姫命二坐ましますとぞ、敬禮のあひだ幣帛をもさゝけず、念珠をもつまぐらず、心中にいさゝかも願望の念なきを内清淨のならひとす、儒者の未發の中、佛家の一念不生といふもひとつれもむきなるべしや、それ天照太神御影をうつさせ給ふ神鏡、すなはち神孫につたはりて禁中にまつらせ給ひしが、第十代崇神天皇神威を恐れ給ひて、大和國笠縫の邑に神籬をたてゝあかめまつらせ給ふ、これ皇居神宮わかたれし始也、十一代垂仁天皇御宇、神託によりて倭姫の皇女神鏡をいたゞき奉りて御鎭坐の地をたづねられ、つひにこの神路山に跡をたれさせたまふとかや、

　ちはやふる神世の鏡くもりなくたかしりてらす宮ゐしらかも

今は、なに事も放下せし心にもなほ兒孫の行方をわすれぬにや、

　老が身ははや七そぢもくれ竹のこの一ふしをなほいのるかな

これよりおなじ度會郡沼木郷山田の原外宮にまうず、天照豐受太神宮一座相殿に三座皇孫尊、天兒屋根命、天太玉命おはしますとぞ、當宮御垂跡は人王二十一代雄畧天皇御宇、天照太神、大佐々命に神託あり、豐受太神を當國へうつし奉るべきよしゑめした

まひしまゝ、命すなはち朝廷へ奏したまひて、丹後の國與謝の郡より遷幸なしたてまつられしとかや、すべて兩宮ともに鳥井の冠木もそらず、御殿に檜皮をもふかず、瑞籬に丹朱をもいろどらず、ひとへに正直の理をあらはし、かつ質素の風をしめしたまふとぞ、

　神風や豊受の宮のみしめ縄かくていく代をまもりますらん

天の岩戸にてみあかしの光を見侍りて

　岩戸あけし神代ればねて諸人のねもてしろくもてらすともし火

宮めぐりに日かげかたぶき、こよひは明星が茶屋をとまりとす。

十六日　の曉ひんがしの空に明星のひかりきら〳〵しきを、

　旅まくらあかつきれきの空はれて名もくもりなき明星が茶屋

安濃の津、上野、白子などをへて神部にやどりとる。

十七日　けふは順風に帆をひらきて七里の舟わたしをこね、まだひつじの刻ばかりに熱田につきぬ、宮めぐりせんとて旅をとまりにさだむ、すなはち沐浴して參詣す、八劔の御本體は天叢雲劔を安置せられたるよしなれぞ、

　神風や天のむら雲ふきはらひひかりあらはす八劔の宮

社中に大眞殿といふありて源太夫の社といふありこの名につけて俗説に、御神體は楊貴妃なり、かの方士が尋ねし蓬萊宮太眞殿はすなはち當所なりといひ、源大夫は玄太輔とかきて玄宗の事なりとひが事をいひならはしぬ、（見蜆風集）あまさへあなひもしらぬもろこし人にさへいひつたへて詩をつくらしむ、（見宗最灘集）神靈をけしたてまつる妄語のつみのがれがたくぞればえ侍る。

十八日　熱田をいでゝ鳴海のすくを過るほど、

日にそへてふるさと遠くなるみがたたちかへるなみに言や傳まし

池鯉鮒（チリフ）をすぎてゆく／＼八橋の跡はゆかしけれど、程へだゝれりといへも得もたちよらず、

かきつはた今もさくやとよそながら心にかけて過る八はし

矢はぎの橋は二百八間あり、東行第一の長橋ぞかし、岡崎、藤川などをへて二村山寶藏寺に參詣す、此寺は東照權現、なは和光のいにしへ御手ならせさせたまふ所とかや、今は神孫五代にわたらせ給ひて、四方の海なみしづかに、一天風れたしけれど、かゝる老法師の旅路さへなにゝれそるゝさはりなきも、しかしながらこの御めぐみとれもひたてまつれど、御手ならひの御蹟さへもいとたふとくをがみ侍りぬ、赤坂をすぎて

御油にやどる。

十九日　よるの雨はれて日かげのどかなり、海道のひだりに本坂越といふ道あり、むかし鎌倉へ下りし人々はみな本坂をとほられしとぞ、吉田の橋は百二十間といふ、石巻山などうちながめてふた川をすぎ鹽見坂にかゝる、萬頃の蒼波雲につゞきたるに、數點の商船風にまかせたるは歸雁のつらをみだりたるに似たり、これなん遠江のなだといふを聞て、

はる〳〵ととはつあふみの沖の海をこゝろほそくもわたる舟人

めしくせるもの丶中にいさゝかいたはる事ありて、まだ日かげたかけれども白洲加にとまる。

廿日　荒井の關所には、幕をうち、屏風をかざり、鎗、長刀、さすまた、つくぼうなどいふ武器をそなへて關守の諸士れごそかに列せり、江戸のかたよりのぼりくる法師、少年、女房などをわきてきびしくとがめあらためらるゝとぞ、

あづま路や名さへあら井の關もりはとがむることもわきてれそろし

今切のわたし船より左のかたに見ゆる山のあなたに濱名の橋ありといふ、行程四里にあまれりときけむゆきて見るに及はず、舞坂を過て一里むかりもやきぬらんとれ

ばゆる道のひだりの方に深田あり、名にしおふ引佐細江といひつたへたり、萬葉集に、

とほつあふみいなさほそえのみをつくし、とよめる歌おもひいでゝ、

老にけるわがみをつくしきて見れどいなさほそえはあせはてにけり

濱松のむまや路を過て天龍川にのぞむ、をりしもみかさまさりていとすさまじく、船中にてめもくるめくやうにおほゆ、此水上は信州諏訪の池よりながれいでゝ、あまた國々の細流おちあひて、此あたりにてはかく大河となれり、岷江の楚に入しためしもおもひいでぬ、舟よりあがりてゆく／＼中泉村にいたる、この所の中泉寺の現住は、さいつ比までわが千年寺（東光寺）の住持にて、あさゆふみし人なれど、安否もきかまほしくてかりそめに立より侍しに、おもひかけぬ御下向などいひて、いとなつかしみたるもてなしゝつゝ、わりなくとゞめらるゝもいなびがたくて一宿しぬ、夜もすがらむかし今の事どもかたりあかす。

廿一日　中泉寺をいでゝ見付の宿をすぎ、袋井のあたりより久能の城山ちかく見ゆ、懸川、日坂などゆき／＼て、さやの中山をこゆるに、かの西行上人いのちなりけりとよまれしもまさしく我身のうへのやうに覺えて、

あつま路やわれもむかしの跡とめてこゆるぞいのちさやの中山

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價	
一冊	十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢
十二冊前金(半年分)	壹圓
全國無郵送料	

廣告料
五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治三十年八月四日印刷
同年八月五日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛

印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木艮雄

發行所 (電話番號本局八八) 東京京橋區築地二丁目二十一番地 國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所　東京國光社印刷部）